
SOUL GAME

NoName

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S O U L G A M E

【Nコード】

N 3 5 2 4 S

【作者名】

N o N a m e

【あらすじ】

3000年を過ぎた日本。そこではゲームは更なる進化をとげ精神を使用しゲーム世界に溶け込むものが開発され、完了した。ゲームの舞台は単純な格闘ゲーム。『ズン』という天才が作りだしたキャラの能力を生かし戦う遊び。ただ、その遊びは限られた者しか出来なかった。

Prologue

パーフェクトダイブゲームというものを知っているだろうか？
ダイブゲームは脳で違う仮想世界に居る体感を味わえるのだがパーフェクトダイブゲームは違う。
ダイブ中はその場所にいた人さえも消えてしまう。
その人特有の所有物全ても世界から消えるシステムなのだ。
何故こんなことが起きるかはわからない。
それにそれは機密事項になっている。
人々はそのゲームは危険だといってやろうとも思わなかった。
しかし人はそのゲームを廃止することまではしなかった。
それは何故なのだろうか？

十

2

3011年の世界。
1000年も昔から国は変わらずに相変わらずの世界になっているらしい。

ただ大体の歴史は失われた。
2500年より昔の歴史は何故かわからない。
この地球と言われる丸いと言われるこの星を包み込むように外壁が作られたのも2500年のこと。

この外壁はその他を遮断する必要があった為と世界を人工的に作る必要があるかららしい。

人々はさらに進化を研げて完全な生命を作り出した。

『クローン人間』　そう人はクローン技術によって作られる人が出てきたのだ。

俺もその一人。

細胞を必要じゃないの以外を取り除き様々な生物の細胞を組み合わされて出来た人間。

白水色の髪に紅い瞳。

それに牙。

爪さえも紅に染まっていて見た目は気持ちが悪い。

それに……

明るいと眠くなるし暗いと目が覚める。

どんなに暗くても紅い瞳が微かな光を見分け鮮明に闇を照らしてくれる。

ある意味不気味だ。

クローンといっても二つの生命細胞を合わせる合成生物なのでこちらのクローン人間を好んで作るうとする人も少ない。

それに違う生物の細胞は何が入ったかはわからないのだ。

適合出来る生物細胞は一つだが細胞合成の時には億という種類の細胞が撒かれるらしい。

その中で唯一取り入れられた細胞がコレだったのらしい。

こんな意味も解らない髪の色、瞳、爪。

夜中には俺の目は他人に恐れられる。

そんな俺は、

いや、俺達か……

まあ俺達は今年に高校に通うようになった。

一年生定員数90人という小さな高校に、

因みにアレだ、

今は朝なので最高に眠い。

いわば俺のおやすみなさいタイムってやつだ。

だが高校に通うようになってはこの時間には起きないといけない訳なんだが。

今までの生活リズムの変化となる訳であって起きれるはずがない。脳は起きていても目が開かない。

そんな俺の耳元に微かにノイズが響く。

「起きて、起きてよ。入学早々遅刻になっちゃっよ」

俺の体を揺さぶりながらいう誰か。

しかし朦朧とする頭では何が何かなんて解らない。

俺は嫌がるかのように寝返りをうつ。

「うー……」

そんな特殊的なノイズが聞こえた。

そしてその後「パン」という小さな音がなった。

スルツと微かな音と共に両頬に触れる柔らかくひんやりとした何か。

そのまま何かが俺の唇に触れる。

ぷるんとして水々しく甘い。水羊羹のような感触。

そして俺の唇を分けて何かが入ってきた。

不規則に動く何かは俺の味覚部分を添うように絡み付く。

そして熱が籠った空気が口内に入ってくる。

俺は眠くともゆっくりと目を開けた。

目に映る光、それは妹のつぶつたまぶた。

唇と唇を重ねそこに舌を入れ込み互いの味覚で感じようと大人な行為をする妹は頬を朱に染めている。

俺はその妹を見て手を妹の額に器用に持って行き。

指を折り曲げ　ピン！と弾けさせた。まあデコピンだ。

「あつっ！」

そういいながら舌を抜き出し俺の唇から離れ馬乗りの状態になる。痛そうに額を摩る妹。まあ血縁はどうか知らないが一応妹だ。

金髪に左側の髪だけを長くしてサイドにドクロのオブジェの着いた髪止めで結んでいる。

俺と同じ紅い瞳に鋭い牙。紅の爪。

俺と同じ夜行性のはずなのだが……

というかこの妹は夜も昼も基本起きている。疲れたら寝ている。

「あつ！おきた！速く学校あるよ！学校！学校！」

何故こんなにも学校に行きたがるのだろうか？

そもそもこの妹のことだ、絶対に授業で寝るに違いない。

というのも俺やコイツのようにクローン人間は学校を非難させられているからだ。

ま、それまで俺達はネットを使用して勉強をしてきたわけだ。他のクローン人間共はどうなってるか知らないがな。

それよりもコノ妹をどうにかしよう。

「あんな、起こすのはいいがな何故キスをする必要があつた？」

眠い目で妹を見ていう。その妹は少しキョトンとした顔をしていう。

「でも甘かったでしょ？」

……………。

まったく質問と違う答えというか質問が返ってきた。

俺は軽い溜息をつく。

「とりあえず次からは止めるよな」

「何を」

「キスだ！」

ええ〜。と言わんばかりの顔をする妹。

「どうしてキスがいけないの？」

それよりどうしてキスがいいかを教えて貰いたいものだ。

まあクローン人間として他人との接触が少ないからこんな目になるのだからけど正直キスまでするようになるのはおかしい。何故なら、

「俺ら、姉妹だろ」

Black Knight

壮大なフィールド。雪の降り注ぐ岩谷のステージ。『幽霊楽団』 Phantom Ensemble』というBGMが流れるなか俺はカウントダウンを待つ。戦闘のLoading。

残り一分で目の前のプレイヤーと戦わなければならない。

プレイヤーネーム『ブラックスミス』。今やこの世界でトップ5に入るほどの神プレイヤーだ。

俺も上位にいる。トップ5だろうとアンダー1であろうとこの世界ではキャラの強さは差ほど変わらない。戦い方や精神のみが強くなる鍵をもつ世界なのだ。

そう、俺は今日をもってトップ5に入る！

肩、腰にある日本の剣を俺は抜く。

そしてLoadingが終え。カウントダウンが始まった。

『ブラックスミス』はただただ無言に立ちながら懐中時計を二、三回軽く叩いた。

そしてカウントが1を過ぎ、0となった。

十

「やっぱり上位の戦闘は凄いやなー」

そんな会話が聞こえる。

遅刻の心配をしながら学校に着いたわけだが案外早く着いたため時間はまだ30分くらいある訳だ。

その為か廊下にあるスクリーンウィンドウ（テレビ）を見ている人がたくさんいた。

「お姉ちゃん。何があっているの？」

そう妹は首を傾げながら聞いてくる。

俺も詳しくは知らないがあのゲームのことだろう。

「ソウルゲームだな」

「それってあの魂を移転させてやるゲームのこと？」

「まあそれだな」

そう、ソウルゲームとは頭にヘッドフォンみたいなのを着けて流れる少数派によって違う世界に意識が送られるゲームだ。パーフェクトダイブゲームとも言われている。

プレイ中の人間は無防備になるため危険だと批判する人がたくさんいるわけだが、それでもなおのパーフェクトダイブという世界で唯一存在しているこのゲームに引かれてこのゲームをプレイしている人も少なくはない。

むしろ俺も興味がある。が、しかし俺はこのゲームのもっとも危険だと思われる点をしっているのだ。

それは、犯罪だ。

このSoul+Gameの世界では暴漢などの行為に対する罪がないのだ。所詮ゲーム世界、本体に対する接触や消失はないらしいが『ソウル』。魂に異常が起きたりする。

別に俺がそのような目に会うことを恐れているわけではない。

俺がそのゲームをすれば、必ず妹もやるに違いないのだ。妹の心配をしているの？百合？シスコン？

別に反論はしない。妹の好意的行動に気づき俺は多少だが妹に好意はある。まあ姉妹という以前に女同士という時点でアウトな訳だから妹の好意的行動は全てあしらっているが、だが何より姉として妹が大切なのだ。

何しろ妹はキスが大切な人とするものと、いうだけで私のファーストからもうハンドレットスぐらいまで奪った程だ。妹もそれは同じであろう。

甘いお菓子のような唇。脳神経を刺激する舌、味覚。背筋に安堵をうつるがす吐息。俺は思い出そうとすれば鮮明に思い出せる。

だがその唇が純粹なままにしていきたい。妹の唇は今だに私の味しか知らないままでいたいのだ。

妹か娘がいる人ならわかるだろう。何より自分より脆く自分より多少なりと純粹なその『女の子』を守りたくなる気持ちだ。

変な世界に陥り、下に走る、雀のように騒ぐ、自分を無視するようになる。そんな目に会うのは嫌だろう？

俺は妹の方を見た……………。
見た……………。
見た……………。

訂正。

さっきまで妹がいたはずの所を見た。
則ち妹はそこにはおらず……………

「うな……………」

Soul + Gameの対戦画面を見ていた……………

はぁ、と小さくため息をついて俺は妹の後ろに立つ。

そして、俺は妹の金髪の生え際付近に手刀を振り下ろした。

十

鉄の剣と銀のナイフが打ち合い、橙色の火花が飛び散る。
ステージに降る雪さえ体に触れぬ程の連麗の高速斬戦。

今だにクリティカルもなければヒットすらないこの攻防。

その中でSpellPointが高まっていく。

ダメージを与える、ダメージを受ける、打ち合う、精神を統一させるなどの行為でSpellPointは高まっていく。逆にステータージ破壊などしたらSpellPointは減少する。

SpellPointとはSpellCardを使用する際に必要となるのだ。

SpellCardと言われるこの対戦の花はとても強く特殊で人の感情を揺るがす。しかしそのSpellCardを使用するには条件がある。

私の二本の剣を一定時間だが通常の5倍の長さで物理に縛られぬ刀身へと変化させる条件としては、SpellPointの大量消費が必要とされている。

どれくらい溜まったかは見えないものなのだが、Soulに響く覚醒の感覚が技を可能だと伝えてくれる。

そろそろ溜まるはずだ……

精神を統一して見えるナイフの動きとシンクロする。

鋭く襲い掛かるその刃を俺はわざと身で受ける。

急所から外れた肉に突き刺さる二本のナイフ。それは深く壮絶な痛みと致命傷を与える。

しかしその一瞬にしてSpellCardの使用条件が揃い、双なる剣にSpellPointが注ぎ込まれ緑白の光が剣を覆い大きさを増す！

相手のナイフが抜ける前にこの大技で一撃必殺をかけて終わる！俺の肩から、二の腕、手までスパイクが走り込み、音速をも越える速さで俺は剣を振り下ろし、そして。

紅のポリゴンが空を舞った……

「うな……………痛い……………」

そう机に屈服するように妹は頭を支えている。

「何故お姉ちゃんは私の頭を叩いたのー？」

少し涙目で俺を見る妹にこう一言、

「叩いてはいない、手刀だ」

「そっかー」

「そうだ」

「……………って、違あああうー！」

「教室では静かにしろ」

「あつ、ごめん」

本当に申し訳なさそうに妹は謝る。本来ならこちらが悪いような気がするが気のせいだろう。

俺は俺の前に座っている妹の頭を撫でる。

俺も妹も同じシャンプーを使用しているからわかるが髪はフカフカとしている。

妹はこのナデナデを受ける度に小さく『うなうな』といいながら幸せそうな顔をする。

「あのゲームは俺達には無縁なんだ。それより早く教室確認とかしたかっただろう？」

そう俺は妹の頭をポンと叩き言う。
妹は少し周りを見渡しながらいふ頬を赤らめながら、

「友達……出来るかな？」

「男だけはやめとけよ」

即答してやった。

まあ男が完成に悪いという訳ではないのだが、奴らの脳内にある女という奴は歴を重ねる度に悪な方向へと向かっている。

妹にはケータイと呼ばれる小型PCをやってはいない。俺も基本使用しないがこの小型PCはPCよりも使用者は多く世界中に響き渡っている。それを利用して広告などを行っているのだが、基本女を性欲のはけ口としか見ていない広告ばかり。その広告は余りにも刺激的で俺もこれを機に自慰を覚えてしまった程だ。

女としての羞恥も昔と比べ生まれてしまった。男みたいな性格な俺がそこまですってしまったのだ。もともとから多少の羞恥があり女の子らしいこの妹には刺激というものは危険なのだ。それに女が友達ならSoult Gameをするような展開はないだろう。女ならSoult Gameの工口い噂やもし経験があつたならSoult Gameを一生したがらないはずだからだ。

まあ全ての男がいけないという訳ではないが万が一に『ハズレ』を引く恐れもあるのだ。もしくはこの学校の男が全て『アタリ』でない可能性も無ではない。そんなこんなで妹には今はまだ女友達くらいで十分なのだ。

私はにこやかな笑みでその髪を撫でる。その一瞬に微かに聞こえた、『お姉ちゃん』と……

「何かいったか？」

そう俺は声をかける。

すると妹はハツとしたような顔を見せ首を振り。

「ううん。なんでもない」

と、いった。

十

「な、……」

何が起きたかはわからなかった。

攻撃は俺がやっていた。SpellCardを発動して技を決めたはずだった。それなのに、飛び散る紅のポリゴン、この世界の血ともいえる結晶は全て俺のものだ……

何故こんなことになったかは解らない。

『勝った』と、そう思った瞬間に俺は倒れていたのだ。SpellCardの発動すら無効とされて俺は大量のダメージを受け地面に倒れている。

体力も感覚的にあと一撃でLossするであろう。

そんな俺の頭上に構えられるナイフ。

彼、ブラックスミスの最後に俺に一言だけこういった。

『つまらない』

と、

十

「黒清音さん」

「はい」

現在出席を先生がとっている。

この先生は確かクローン開発者の関係者であり観察者でもある人だ。クローン人間では当然ない。

「黒邪音さん」

「はい」

そうだ今更なのだが、俺は黒邪音。さっき俺の前に呼ばれた黒清音というのは俺の妹だ。

年齢は違うといえは違うかもしれないが実は違わない。俺達は一卵性の双子なのだ。まあそれはメデイカルケース判定の結果でしかないのだが。

同じ動物の遺伝子を受け継ぐ邪音と清音。しかし一卵性というのはその動物の遺伝子であり俺、則ち人間の遺伝子は二卵性という訳だ。

その細胞の活性は清音よりも速くメデイカルケースから約10歳の体つきで俺は生まれ。清音は同じ日に同じメデイカルケースから約8歳の体つきで生まれた。

あくまで進化の過程、たった一ヶ月で精子と卵子、またメデイカルの中に億万と隔離された他生物のDNAを元に科学的に生み出されただけでちゃんと生きた時間は同じなのだ。

そんな無駄なことを考えているうちにホームルームも終わり、授業準備の為の5分の休みが始まった。別に準備することもないので俺は机に顔をおいて軽くあくびをした。

i n L i t t l e S i s t e r

「これだけど、やってみない？」

昼休みに渡されたのはただ一つのヘッドギアだった……
確かこれはSoul+Gameに必要なものだったはず……
そしてお姉ちゃんが私をこれから守っていた。
何故かは解らない。私は疑問があった。

人はこれを楽しそうに見ていた。ならば私も楽しめるはず、
光という人から渡されたギアは少し古く灰色のデザインで彼女の
ギアは新しく黒のフレームに白いラインが入った綺麗なものだった。
彼女曰く『この世界は知らないと損』らしい。

私はお姉ちゃんがこれが無縁といていたことを思い出す。

無縁………

本当に無縁なのだろうか………

今古くていらなからという理由だけで渡されたギアでSoul

+GameをPlay出来る権限を得た私………

縁はある………

そう私は思う。

「や、やってみる………」

十

「清音………」

妹を俺は探している………

妹は当たり前だが授業中はノートに絵を描いたり寝たりしていた。そんなこんなでお昼となった訳だが弁当もないのに友達と遊ぶとかいって消えていったのだ……

背中まである黄が濃い金髪でボーイツシユ性が漂う女の子だった。クローン細胞が入っているかどうかなんてわかりはしないくらい普通の体をしていた。

そいつが清音を購買部おごってやってるのなら俺は安心なのだが……

もし、太陽が苦手な俺達、清音が太陽下で遊んでいるとしたら心配だ……

そう……心配だ、

なのに何故、何が心配かわからなくなってくる。

誰を心配しているかもわからなくなってきた……

……………え？

俺は何をしていたのだろうか？

十

『名前を登場して下さい』

そうProgramが私に求める。

ギアを装着したときに流れた言葉。

【Are You OK?】

その言葉に私は返事をした。合間な返事だったけど同意を確認する為だったらしくその瞬間に意識が消えた。

そして目を覚ましたらそこは未知の世界だった。

地面に足は着かず、何やら空を浮いている。天球に囲まれた地球。その天球の世界のように様々な星がある世界に私は着いた。

『名前を登場して下さい』

「あ、うん」

とりあえずProgramに返事してみた。

私はとりあえず思い付いた名前を登録する。

『カノン(Canon)で間違いありませんね』

「うん」

『それではようこそSoulTGameへ。マニュアルを渡しておきます』

すると上から何やら白いカードが現れた。

『知りたいことがあればそれを使用してください』

「使用方法は？」

『知りたいことがあればそれを使用してください』

「……………」

さすがProgramとだけいっておこう……………」

『それでは登録の元、脳内に世界未確認データを挿入します』

「……………」

えっと……………」

「世界未確認データ？」

『カウント5』

「えっ、ちょっと待って」

『4』

「何どついついと」

『3』

「てか何このカウント!」

『2』

「うな!畜生!」

『1』

「所詮プログラムかああああ!」

『データ挿入』

その音と共に何かが私の脳に入ってきた。まるで風邪をひいたかのように頭が熱くなる感覚。更に変わったことは……

シャン

とした、背中の両肩甲骨から生えた二本の黒き棒?その棒に繋がって輝く宝石。そして服装は赤みのかかったTシャツに黒い短パン、念のため確認したら純白のショーツだけになっていた。

「……………え?」

うん。言葉を失わなかっただけよしとしよう。正直何があったかわからないです。

『それではSoul+Gameの世界によつこそ』

私がそんな思考をする中、勝手にプログラムはそんなことをいい。世界が青白く光った……

「さて、清音は上手くinしたかな？」

そんなことをいつてる私はライト。このゲームを少し理解した存在なんだぜ。このゲームは理解できないことが多く少しでも理解出来れば立派だと思う。

まずは……

私は『 』 こんな形をした何かを召喚した。感知魔法の一種だ。対象は現実世界で私の近くでinしている清音という少女だ。

「えっと……まだ宇宙にいるのか……」

宇宙というのはこの世界に初めてinする時にプログラムと会話してこの世界の力を貰う所だ……

清音の姉の邪音がどうやら日光嫌いみたいだったので清音も吸血鬼の部類になるんじゃないかな？とか思う。

それよりあれだ……速く弟子を作りたい訳よ私は。

このSoul+Gameという世界では強化武器おるか家、物、食事、服に『 』と呼ばれるお金が必要となる。更に戦闘をソウルで観戦するのは家よりも高い が必要となる。

の貯め方は簡単でSoul+Gameのバトルシステムで勝利する。

Soul+StorySystemと呼ばれる世界で冒険して貯める。

この二つが代表的で他にも現実世界にあるような貯め方が出来る。屋台を作ったり。

Soul+StorySystemで手に入れた強化武器を売ったり。

更には……裏のルートで金を集めたりも……

とかそんなことを魂の脳内で思っていたらどうやら清音ちゃんは無事にinできたみたい。無事にinできないパターンなんて知らないけどよかったよかった。

あっ、そういえばもう一つだけポイントが貯まる方法があったんだ

上位プレイヤーと認められた人しかできない権限。それは師匠。弟子を一人だけ作ることができてその弟子が上位プレイヤーになった時に膨大な が入るのだ。

私はこの世界での夢がある。その為には が必要なのだ。

今まで は幾度が貰ったけど服やらこの世界でしか食べれない食べ物に消えてしまったのだ。

目標の は高く普通にこんな生活じゃたどり着くはずがない。

だからちゃんと一人前になるまで弟子でいてくれるような清音ちゃんを弟子にしたのだ。

と、まあ清音ちゃんもinしたみたいだし今頃オロオロしているだろうし……

「転移魔法！」

私の足元に の形の紋章が出て砕ける。そして私は場所を転移した。清音ちゃんの元へ。

十

「なるほど……」

さっき貰った白いカードの有効期限は一時間のみ、私は10分でおおよそ気になることを聞いてだいたいを把握した。

私の考えつく範囲だからお姉ちゃんが考えつく範囲はわからない。お姉ちゃんならもつとこの世界に疑問を抱くはずなのだろうけど……何よりこのカード自体がわからないことがこの魂の世界に存在している。この世界の住人が作り出した範囲はカードもわからないみたいだ……
というか……

「うらやましいなあ……」

色々な人がそこらを歩く中、私だけもう服がダサイ。女の子というよりガキにしか見えないよ。と言われる単位のお金、単位としては10円11。このゲームプレイヤーだけの特権として、銀行でと円の交換も可能。本当によく出来たゲームだ。

魂の世界は地球の外の世界よりも未開発で自由自在らしい。本当の無限が存在する。

円周率は途中で諦めれば無限の前で止まる。無限ループも止まりはくる。世界拡張もいずれ終わりはくるだろう。

所詮その分類の無限というものはあくまで範囲を広げたもの。本当の無限には至らないのだ。

しかし魂は浸透、そして進化。永久、永遠、永劫。無限とはこんなことをいうのだ。

人も最初の一つの獣から始まり二つに解れた。野生に生きる、『猿』への進化。知性に生きる『人』への進化。

進化の過程は脳ではなく。

想い

声を使いたい。火を使いたい。武器を使いたい。それが魂に揺さ

ぶりをかけて進化は始まった。

いわばこの世界は進化の世界なのだろう。

私はパタパタととりあえず暇なので羽を動かす。

シャンシャンシャン

羽が奮える度に綺麗な音がる。

「何やってるだぜ」

そんな時後ろから声が聞こえた。

振り向けば黒いトンガリ帽子に白黒のデザインの服。動き難そうだが長いスカートをはいてる。下着は………って気にしちゃだめか

……

「へー名前はカノンか」

私のWindowを覗いたのか名前がすぐ見抜かれた。

「あ、貴女はだれのですか？」

驚き混じりに私はいったら彼女は軽く手を動かしていった。

「口調は違うが、清音って奴にギアを渡した奴だぜ」

「えっ、光さん」

「さん付けはやめれ」 それにこの世界では………」

そういつて光は指パッチンをして何かを取出した。

「指パッチンうらやましい………」

「そんなことはキニスナ。ほら、私のこの世界での名だぜ」

私は名刺を手を取って見てみる。

そしてその名刺にはこうかかれていた。

『L i b g c t』

ライト？

「ライトって名前？」

「ザッツライト」

「ネタはいいですから……」

「(、・、・、)」

何かシヨボーンとしている。

とりあえずこれが私達の出会いだった。

「とりあえずもう時間的にアレだからLog outするだぜ」

「りよ、了解」

昼休みが終わる前に、互いを確認して直ぐに私達はLog outをした。

o u t L i t t l e S i s t e r

i n L i t t l e S i s t e r (後書き)

ライト

ユーザーの本人は男の娘ですが女の漢として使わせていただいています。

『めーさく・・・なのかつ!?』 『悪鬼』 『月明かりの綺麗な夜に』の三つの短編小説を始め。今では『文の夢』という小説を書いている人です。

名前のイメージからしてDEATH NOTEの神様を想像した私でしたが、関係はありません。

今だにまともに小説は戦いには入りません。多分あと2話くらいでやっと戦いが入るでしょう。

次回！彼女もSoul+Gameの世界へ

俺は一人で購買のヤキソバパンと言われるものを頬張る。

何か初めて味わう感じだ……

学校でご飯を食べることでなければ、パンの味が初めてというわけではない。

一人で食えることが初めてな気がする。

いや……確か俺は今は”一人ぐらし”だったはずだ。

親はクローン人間で人前を歩けなかった俺の為になるべく贅沢させようとたくさん働いているのだ。

休み期間や暇な時にはよくあうが親と食事をした記憶はあまりない……

なのに何故俺は今まで一人でご飯を食べた記憶がないのだろう。

一面を見渡せば頭にギアを装着している奴らがいる。

「S o u l …… G a m e か……」

俺は呟く。

何か俺はこのゲームを避けていた気がした。今まで暇な人生の中でこのゲームをしなかった。何故だろう……

ゲーム内での犯罪がなく暴漢などが行われたりする……

そんなのは関係ない。現実でも暴漢などあるだろう。ただこの暴漢が理由で俺は避けていた……

「はあ」

俺はため息をついた。

何か心にひっかかるものがあるのだ。

俺は下を見た。

そんな俺を橙寄りの金髪の少女が下から見ていた……

「……………」
「……………」

互いに無言。

というかコイツだれだ？

黒い服に黄色のネクタイ。頭には赤いリボン。ロングスカートを
した幼い少女……。その瞳は暗くそして赤い。ぼつけた口から微か
に見える牙らしきもの……

「……………」
「わ……………」

彼女の口が微かに動く……

「わはー？」
「……………」

……………

「は？」
「わはー」
「だから何？」
「わはー！」
「……………」
「……………」
「わふ……………」

コイツ、人間かよ。頭おかしいんじゃないか？
そんなこと思っていたら。

「闇……不安……」

そう彼女はいった。

「不安…… 変わりあり…… 知りたいか？」

そう彼女は俺に告げる。

コイツは何をいつているかわからない。ただ……
何かコイツのいうことに引っ掛かることがある。

『知りたいか？』

この言葉に俺は妙な感じを思う。

気がつけば金髪の少女は消えて……

黒に血の跡がデザインの変わったギアが置いてあった……

十

彼女の闇を私は見た。

恐らくまだSoul+Gameをプレイしてない人だろう。

あの世界は本当に闇で、私さえも見通せない。

彼女の妹は先にいった見たい。

ならば彼女も行くべきだろう。

奥深くまで闇に染まった魂の世界。

その世界で本当に魂を返れるその人が現れるまで。

私は何度も……

何度でも が金に変えそれをギアに変えてきつかけを与える。

私はライコ。

全ての邪竜の王姫なり。

「おい。竜姫ちゃん一緒にinnしょー」
「そーなのかー」

私は闇に埋もれた返事をした。

十

【Are You OK?】

ギアを装着した直後に流れた。

俺はギアを着ける気持ちはなかった……

しかし俺は引かれた。

Soulがギアに反応をする。この今まで初めてらしき感覚がこの世界からきていると魂が叫んでいるような気がした。

世界に偶然はない。必然のみ。いや……偶然は存在する。魂が炎と推奨されるなら稀に見える不規則な爆発燃焼。その爆発燃焼が俺に……いや、何か俺に関係する誰かに響いているのだ。

ギアをつけてこの音を聞いて完全に理解する。

暗い向こうに見える俺に似た少女の姿。

Are You OK?

上等だ。

「Let's Soul+Game」

その瞬間に世界が変わった。

視界は白い色に染まりそれから黒へと変色していく。その黒に微かな光の粒が写りゆく。ネットでの伝説、空想世界のソラ（宇宙）と言われるものに似ている。

ふわふわと俺はその空間に浮かび辺りを見回した。

やはりソラであり闇であり無限を感じられる世界だ。

『名前を登録してください』

いきなりノイズが響いた……

名前……

「ふーん。ゲームだけあつ

『名前を登録してください』

「ちよつ、台詞中に五月蠅いのだ

『名前を登録してください』

「……………」

『名前を登録してください』

とりあえず5秒置きに繰り返し『名前を登録してください』というシステムらしい。ウザい。

とりあえず俺は名前を打ち出す。強さを意味した名前を。

『フォルテ（Forté）で登録します。知りたい事があったらこれを使用してください』

登録の確認もなく。決定となり、俺の手元に白いカードが渡される。

そのまま微かに機械音が響く……

そしてそれが止まりまたノイズが響く。

『それでは登録の元、脳内に世界未確認データを挿入します』

インストールか……

というか少し疑問があるな……

それは白いカードを通じて聞くとするか……

カウントが始まり終わるまでに俺は首の骨を一回だけならした。

そして『データ挿入』というノイズが響いた途端に何か流れ混んできた。

何、特に変わったことはない。ただ、

清音が今まで俺の記憶から消えていたような気がした……

ただ、今では清音との記憶がある。

そういえば何故俺はこのゲームに手を出した。妹にあれ程無縁と
いいながら……

それに……何故……

俺は一人で昼メシを……それにあの少女は……

不安……闇……今だに消えない。何故だ……

そう何かを考える中、俺に最後のプログラム音が響く。

『ようこそ、Soul+Gameへ』

さっきまでの暗さは消えて俺はある村の所にいた……

「って、なんだこの服！」

白いワンピースに麦藁帽子。下着はまあ……白か……いつもの俺
と下着は変わらん。というか何故こんなヒラヒラしたものを……

俺はカードを取り出して質問する。

「これ、他に服はないのか？」

『シヨップで購入する必要があります』

ちゃんとカードは仕事をした。

シヨップか……さすがゲームだな。

「そういえばこのカードはいつまで使える？」

『開封から一時間です』

「カードで知られる内容の上限は？」

『私の知る内容のみです』

「なるほどな……」

とりあえず知りたいことを質問しておこう。なあにたくさん聞いて損はないだろう。

「このゲームの作られた理由」

『……………』

さっそく無理か……

「この世界に入っている状態での自分の肉体への保障」

『それは抜きありません』

「何故？」

『このゲームにいる状態では現実世界の魂は皆無レベルに低下、すなわち死んでから約一億年たったただの一般人並の存在感の薄さになっっています。』

「薄すぎだろ……」

『すなわち捜そうとしても視界に入れていても気がつかない状態で

す
『

それって……

清音がこのゲームをしていても俺は気がつかないってことか……
というか清音だ！清音はさっきまで俺の記憶から消えていた！だ
ったら清音はinしているのかもしれない。

「おい、清音ってプレイヤーはいるか？」

『清音ですか？偽名など使われている世界でその名前を特定しても
無意味だと思えますが……』

「そっか……」

とりあえず清音はこの世界に来ているかもしれない、そう考えて
おっつ。

とりあえず後15分くらい俺は質問責めをしてそれから昼休みも
終わるだろうからGame Outした。

+

「どうしたの、ライコちゃん」

そう彼女は私にいう。最強のバカ、ハルと……

「ボウツとしてるよ？」

苦労人のマーボー。

実際にこの二人の強さは異常だ……

ランキングトップだって初見なら多分、勝てないだろう。

まあ、私達は来たる日が来るまで大切なSpellCardは使

わないのだが。

「ちょっと戦い人類が出来たのだー」

「ふーん。あたしも戦っちゃ駄目かな？」

「ううん。これは私の撒いたギアだから私に任せてほしいのだー」

そう、黒邪音。彼女は喰えるはずだ。

あの魂に張り巡らされたメイデンハック。この世界を、真理を、そして無限を見つければはずだ……

あは

「あなたは食べられる人類？」

i n B i g S i s t e r (後書き)

「あなたは食べられる人類？」の比喻表現を元に正すと、あなたはこの世界に認められた人ですか？という意味になります。さて、とりあえず今回はライトの戦いが始まります。新キャラは出ません

ハルさん。マーボーさん。竜王さん達はみんな

たくさんの小説を同時連載しておりまた、所々短編も書いています。ぶっちゃけ。ネタバレというかまあみんなわかっていると思います
が、

チルノと大妖精とルーミアです

最強です

というか現在の原稿でこの三人の内、大妖精が一番強くなっていたり
というかこの三人に勝てる設定が作れなかったり……
どうしよう……

そんなことを思う私でした

StarLightBrake

「おつす。夜中inも成功だな」

そう私は声をかける。昼に弟子になつたばかりのカノンにだ。

「お昼よりプレイヤーが多いねー」

「まあこのゲーム中は本体は寝ているに等しいから夜は基本みんなやつてるんだよ」

「へー」

「まあ、それでも普通に寝てる方がいいやゝ みたいな奴もたくさんいるがな」

「それよりライトさん。今から何をするんですか？一緒に対戦ですか？」

「まあそれもいいけど……まずは服を買いだいたいだろ？」

女の子がこんな地味な服じゃ可愛そうだもんな。まあ似合っただけはいるけど。

「そんなこんなでとりあえず私を手っ取り早く集めて見せるんだぜ」

と、いつても裏闘技場だけだな。金稼ぎとこのゲームの危険性、および戦いを見せるにはここが一番いいだろうからな。

「よし、それじゃ魔法でっつ飛びだぜ！」

私は を描き、それが砕けると同時に青い光に包まれた……

青い光が消えた先に見えた先には地下通路とそこから歓声が響いていた。

とりあえず私はお姉ちゃんに内緒でこのゲームをしている。結構危ないらしいけどいまはライトさんがいるから大丈夫だろう。私達が進む先に一つの受付があった……

「観戦で頼む」

ライトさんは一言そう呟きそして……

「じ！5000！？」

5000（5万円相当）という大金を出した。

「な、なな、なんでこんな大金を……」

「ん？ここでの観戦は安い方だけ。それより、少し覚悟しておけよ」「えっ？」

そう、私は腑抜けた返事をした。

そうして私達はある席に転移させられた。

周りは歓声、そんな中戦いが起きていた。

いや……戦いではなかった……

一人の女の子が三人の男プレイヤーに、犯されていた……

「えっ、な、ななな、何、コレ」

私は赤面をしながらいう。嫌がる女の子に群がる男達の手、体の接触……

ライトさんの口が動く。

「これが裏の闘技場だ。戦いは女と男のみで戦う。30分絶対に戦うこのシステム。戦いに出るだけで50000 という大金を手に入れれるが……弱い女はこうなる」

涙を流しながらただただ喘ぐ女の子……

周りの男はそれを見て歓声を上げ、他の女は蔑むような哀れむような瞳で見ている。

「戦いは最初に一人の男と戦い二人目が5分後に追加……さらに10分後に三人目が追加されるってわけだ。それに10分後の奴なんてプレーヤーと相性の悪い奴ばかりだから基本、女は犯される」

「そ、そんな！そんなの酷い！私はやらないから！」

「心配なくていい。私は弟子にそんなことはしない。ただ……」

少しにやけながらライトさんはいった。

「私が次に出場する。これで稼ぐってやつを見せてやるよ」

そうライトさんはいった。

今の凌辱という名の戦いは終わり、ライトさんの体が私の側から消えていった。

そして……

みんなが消えた闘技場にライトさんがいた。

ステージに立つと聞こえるBGMもこの闘技場では聞こえない。
『恋色マスターパーク』って曲を聞きながら戦うと私の力は増加するのだがさすが闘技場、確実に犯せるように奇跡すら与えないくらい最悪な環境だ。

そんな私の目の前には一人の男が現れた。
どうみてもいいオンバシラーですね。

見るからにパワータイプか……

そして戦いは始まった。

最初の5分から戦いを決める必要はない。

あくまで30分逃げれば勝ちの闘技場。

私は指パツチンをして星屑を散らす。とても眩しい光に敵は目を塞ぐ。

瞬時に駆け寄り私は拳を腹部に当てて星のエフェクトが飛び散る。さすがに最初から出る敵だ、簡単にやられるような奴ではない。

ただ、戦いのためにこのゲームをやっていない分、こいつらは弱い。だからこそ！

「はあああああ！」

私は手に星屑の渦を作り出し、

「てりやああ！」

放出をした。

星屑は敵に当たりそいつを吹き飛ばす。チャージに時間がかかるこの技は威力も低い、だが命中回数が多いから、Spell Pointが良く貯まる。

それは相手も同じだろう、

しかし相手も私も馬鹿じゃない、最初からSpellCardで勝負をつけるはずでもない。

一瞬、後ろから殺気が見えた。

私は星の転移魔法で上空へ待避する。

案の定二人目が私の背後をとっていた。回避が遅ければ多分さっきで犯されていただろう。

相手は妖精の羽をもっている。

とりあえず突っ込んでくる二人目に私はまた星の閃光を繰り出した。

一人目のオンバシラーな男には聞いたが、もう一人は、

「がはっ！」

その閃光を無効化にして私の腹部に蹴りを浴びせる。

吹き飛ばすなかその男は光を私に浴びせる！

「やべっ！」

地面の感覚も解らずに私は腰から地に落ちた。

どすっという音がする。結構いたいぜ。

どうやら二人目は光を使えるみたいだ……

「ふ〜。やべ〜かな〜」

そう私は脳天気という。

寝ている私に近づく二人。

私を囲んだ瞬間に私は一つの魔法を発動する。私の体を含めて飛び散った星が爆散する。

マジいてえ。

だが二人も私から離れた直後に妖精に強烈な星の拳で喉元を切り

裂く。

妖精キャラは能力が高い分防御が弱い、SpellCard無しでもクリティカルヒットで倒せるレベルだ。しかしまあ、闘技場だけあってクリティカルヒットの判定はないようになってる。首元を抑えながら妖精は立ち上がる。

残り時間は約18分、そろそろ三人目がくるだろう。基本的にこの三人目でSpellCardを使う訳だが！

もう、使っていていいかー

「いくぜ！」

私は手にSpellPointをチャージして空へ掲げる、小さな星が空に何個も飛んでいった。

そして、

「墮ちろ！」

巨大なメテオとなって地に降り注ぐ！

最強SpellCard。強力でしかも範囲も馬鹿でかいこのSpellCard。まあ長持ちはしないけどそれでいい。

妖精のプレイヤーは完全に体力を失いポリゴンとなって消えていく。

オンバシラーな奴、今更だけど神様タイプのプレイヤーはかろうじて生きていたようだった。

「っ、しつこいな」

舌打ちをして素直に感想を述べた。生きてるほづがづらいのに。三人目が現れる。

もう、三人目なんか関係がない。SpellCardを使い切っ

た私はもう強力な技もない。また溜めようにも技を見切られている。
だが……
甘い……

「全く、ここの闘技場で私が何回稼いだか記憶してないのか？」

そう私はいいなからZUN帽に手を入れる。そこから何かを取り出した。

SoulStorySystemで手に入れた最強の魔法具。三二八卦炉。

魔法具で威力の値は……

『戦闘で使用した星の威力の合成値』

すなわち、全て星を使う私に最強の魔法具……

売れば百万、現実で一千万円をもする最強の魔法具。

私は八卦炉の能力を解放した。

三人目がどんなキャラかなんて関係ない。一人目がSpellCardで強力なブロックを打ち出しているが私の八卦炉に飲み込まれる。地面すら破壊していくこの奥義。

最強の魔法『スターライトブレイク』

戦いは17分で全てのプレイヤーを撃破して終了した。

十

現在は喫茶店。

カノンの私はケーキを食べている。

「それにしてますごいですね。あんな簡単に勝ってしまっなんて」「まっ、最初のザコ達がいいカモになったからな」

と私はいう。ぶっちゃけ本当の対戦ではランキングに入ってる奴らには負けてしまうだろう。あいつら回避上手だし八卦炉を撃つ前に起動変換させられたりするし……

SoulStorySystemならNPC相手だから簡単なのだけだな。

「とりあえず私の戦いも見れたし闘技場が危険だともわかっただろ？」

「う、うん」

「だから闘技場に誘われても参加するなよ。初心者は騙されて犯されたりよくするからな」

「は、はい……」

「よい、返事だ……それじゃ、私達は服でも買いにいくかー」

そついいながら私達は100 を消費して喫茶店をさった。

StarLightBrake (後書き)

ライトさんの『スターライトブレイク』は魔理沙の『ファイナルスパーク』と何の変わりもありません。

とりあえず戦闘描写が苦手な私が戦闘をメインとした小説を書いてしまったわけですが……

やべっ、書き直したくなっただ！

なのに携帯だと書き直しがしにくい！

戦闘描写が薄い

もう修正無しでいっかー

みたいになってしまいました。

すみません。

次回はカノンが戦います。

Seven Fire Girl

「へへ、可愛いのが好きかと思ったが案外カッコイイな」
「えー、可愛いと思いますけど」

現在服を購入しています。流石Soul Gameの世界で、単価も2500、2万5000円相当もする珍しいデザインの服ぐらいしかないなか、さっきのライトさんの稼いだお金で服をおごってもらっている。

ピンクのパーカーに淡いピンクでスカートカラーのコウモリがポイントされた少年帽子。そして紺色のスカートに黒いスパッツ、スパッツの中のショーツは水色のストライプ。パーカーの下には白いタンクトップを来ている。まあ垂れる胸はないのでブラはない。はあ、くやしい、くやしい。

で、額は約4000。パーカーと帽子以外は案外安かった。ストライプカラーまでピンクにすると値段は更に高くなるのだけれど……そんなショーツに一区関わってみる変態でもないし、他人に四万円もおごって貰っただけで私は満足だ。

お店を出てライトさんと一緒に歩きながら会話する。

「そういえばここで手に入った をお金にできるのですがこれでお金儲けとか出来るんじゃないですか？」

「まあ、そうだな、しかしだなカノン」

「はい？」

「逆にお金から にする人が多いんだぜ」

「えっ！もつたいな！」

「いやいや、こつちの世界のほうがたくさんの方があり食べたことも見たこともないゲームがある。カノンはネットゲの経験は……」

「な、ないです」

「まあそれならわかり辛いかと思うけど課金といってゲームの内部でガチャをするようなネットゲがあっただな、課金でわざわざ200円払って回さないといけないガチャがあるんだぜ。馬鹿げていると思うが実際それでしか手に入らないとしたら金が必要、こちらの世界でもそう…… を溜めるのは簡単ではないんだ」

「えっ、というと……」

「私のようにたくさん金を稼げる人間は僅かとも言えるんだ。金は課金せず努力して貯めている、まあ裏闘技場で私の認識が消えたころにちよくちよく稼ぎにいかせてもらっているけどな」

「……あの、ちなみにライトさんは裏闘技場であんな目にあつたことは……」

「一回だけあつたぜ。一回稼いだあとにすぐにもう一回稼ごうとしたら最初から相性悪い奴ばかり出てきて、20分くらいレイプセッションになつちまつた……」

「やっぱり、あそこで稼ぐのはやめといた方がいいですよね」

「カノンはやめていた方がいいな。まだ自分の力もわからないだろうし」

「ですよねー」

私だつてそうだよ！やりたくないよ！例え を貰えてもあれだけは嫌だ。

しかし……私の能力って何なのだろう？基本どのゲームだつてプレイヤーにはどんな力があるかわかるはず。対戦でしか能力発動出来ないのかもしれないが……ライトさんは魔法を通常でも使っているし……

「あの、ライトさん。私の能力って何なのでしょう？」

そう私は尋ねる、ライトさんだ何かわかるは

「知らん」

DESUYONEeee!

って！

「じゃあ私はどうしろと！」

「まあもちつけ」

「はい……」

「今、私達が向かっている場所はプラクティスルームに向かっているんだ」

「プラクティスルーム？」

「ああ。体力が尽きてもすぐに復活出来るしダメージを受けてもすぐ回復する。戦いの勝敗を関係なくして永遠と戦える場所だ。ちなみに無料」

「それはありがたいですね。というかそこまで何故転移しないんです？」

「うん？そりゃあ駄弁りながら歩きたいし、珍しい店があったら寄りたいし」

私は周りを見渡す……

珍しい店といえば珍しい店がいくつもある。『八目鰻』とか書いてあって何と読むかわからないけど何やら香しい香りがする店があるし、他にもマシンガンらしいものが売ってある店やら、お酒が売ってある店もある。

どれも現実世界にない珍しいものばかりなのだがライトさんにとっては普通の物みたいだ。

「着いたぜ」

ライトさんは何やら看板らしき前で止まった。

「あの？ライトさん？看板しか見えないのですが……」

「ああ、ここの看板がプラクティスの世界に繋がるんだぜ」

「えっ？」

「プラクティスといってもエリアの能力で力をえる訳だからな。『永遠の魔法がかけられた屋敷』といわれる場所に転送されるんだ」

「永遠の魔法？」

「ゲーム設定によると、昔の世界にいた『蓬莱人』と言われる人型生物が『玉の枝』と言われる宝具を奮った時に出来た空間らしい。

さらにだ、この玉の枝」

「？」

「プラクティスの世界にあるらしいんだ。それだけではない、9つの宝具、レアアイテムがこの空間にあるらしいんだ」

「ええ！」

「まあ、私はいらないな」

「いらなんでしょうか！というかあるらしいってまだ発見者いないんですよ！」

「まあいないが……探す気持ちなんて失せるぜ」

「えっ？」

「まあいい、とりあえずこの看板に組み込まれた魔術式で転移だぜ」

そついいながらライトさんは私の腕を握り看板に手を置く。すると文字が私達を黒く纏わり付きそして、

「うわわわ！」

何か天井から引力が現れたように体が不安な感じになって私は尻

餅を着いた。

「いって」

そついいながら目を開いたそこには！

「はへ？」

黄緑の硬く細く長い植物がたくさんたっていた。

「ほら、起きろ」

ライトさんは握っていた腕を引つ張り立たせる。

「ほら、カノン。これが永遠の魔法の屋敷だぜ」

「屋敷というか見たことない植物しかないのですが……」

「ああ、これは竹だ。100本斬れば1 もらえるぞ」

「どうでもいい情報ありがとうございます。というか広いですね……」

…他のプレイヤーとかいないんですか？

「いるぜ、スツゴく遠くに」

「宝具探しをしているのかな？」

「それは、ないない」

「何故？」

「だってこのステージの範囲って………10の68乗の範囲なんだぜ」

ろっ！

「68乗！」

68乗つてことは数にすると1,0000,0000,0000,
0000,0000,0000,0000,0000,0000,
0000,0000,0000,0000,0000,0000,
0000,0000になる訳だ。見るだけで疲れる。ちなみに単位
はKilometerだろう。

「ということは……宝具探しは
無理だな」

正直な気持ち、少しでも私が手に入れると期待した私が馬鹿で
した。

というか流石ゲーム設定でもこれは酷すぎ、地球は4,5000
kmだっけ？まあそれくらいとして、その範囲でも場所がわからな
い宝を探すのは無理に等しい。更にな、竹と言われる植物が淡々と
続くこの場所、どこを探したなんて忘れてしまいそうだ……
私はため息をついた……

「まあまあ、それより戦おうぜ」

「そうだね。でも私は初心者だから戦いなんてわからないし能力も
……」

「そんなの……戦ってりゃわかるんだぜ」

そうライトさんがいった瞬間に目の前に 弾が飛んできた。
私はそれをありえない速さで避ける！回避をした。

「おっ、なかなかの反応速度だな」

「わ、私も驚いています」

身体能力は高くなっている。とりあえず私は拳を握りしめる。

「じゃあ殴りにいきます！」

なんとという物騒な戦い方。しかしこれくらいしか戦える方法は知らないし……

大丈夫、暇つぶしにお姉ちゃんと裸でプロレスごっこかした嘘ですゴメンナサイ。暇つぶしに少々格闘をしていたし殴り方は結構隙がないはずだ。

「てりゃ！」

というか自分でも驚くほど速い打撃が打てた。その速さにライトさんはついていけず、

「ぬあっ！」

右頬に私の左ジョルトが炸裂した。吹き飛んだライトさんは竹にぶつかり竹が折れ あんな細い植物の癖に折れなかった……

「な！なんなんだぜ今の速さは！」

「いや、何って普通にジョルトですけど」

「いやジョルトってなんだよ！これなら私も小細工無しの本気バトルがやれそうだぜ」

そういつた瞬間にライトさんの周りを が囲む。

そしてライトさんみずからが接近技をしてくる。

カウンターストライクを決めようと拳を構え、左足を大きく踏み込み左腕を突き出す。周りの に拳は弾かれたし、その拳からポリゴンが散ったがそうなるだろうと推測していた。もともと左足で踏み込み左腕で打つ技なんて威力が低い、すなわち本命は！

「りゃあ！」

右回し蹴り！

ライトさん周りの を蹴散らした。が！

「いな

『いない』と言おうとした瞬間に背中に拳と炸裂する爆発が起きた！

「残念あの はフェントさ」

いつのまに の膜から抜け出して後ろに……とか思いつつ地面に転がり！竹に頭をぶつけた……

そして竹は折れた、なんで私がぶつかったら折れるのかな？プログラムの嫌がらせ？デブだとかいいたいの？体重39kgだよ。

そんなことは関係なく何か体を感じる物があつた。熱い、思いが

……

しかし使い方がわからない、

「ちよ、ライトさ

振り向き様に の弾が顔面ヒット。話をきけえええい！

私は体制を立て直し跳躍をする。

ライトさんの前の竹を蹴りつけ竹を倒す。倒れた竹をよけるライトさんを私は馬乗り、いや、マウントポジションを作った。

「あつ！なにこれやべえ」

ライトさんの腰の動きを馬乗りの状態で完全に封じ拳を顔はまず

いのでいつては悪いけど貧相な胸に叩きつける。

「がは！」

強打強打強打強打！やべえ病んできた。

「あははははははははは！」

「ちよ！怖いぜ！」

「あはははがふっ！」

調子乗っていたら顔面に弾幕ヒットしました（涙）

よるけた私の腹部にまた弾幕ヒット。その瞬間に何かが宿る感じがした。しかし、わからない。何が宿ったかは使いみちも何もかも。

「せりゃあ！」

ダメージを受けたあとの私だからかなんなく私を引きはがして距離をとられる。

「はあはあ、お前……怖いぜ」

どうやら怖いがっているようだ。いや私は怖くないよ、大丈夫大丈夫。

「私は……怖く……な……いよ……」

ちゃんと言おうとしたけどお腹が痛くて言えませんでした。

「ヒィィィィィィ！あ、あ、あ」

余計に怖がらせた見たいでライトさんは

「す、SpellCard発動！」

必殺を発動しやがった。空中から降り注ぐ星。ならば私も必殺をだすしかない。

「必殺！昇竜拳」

飛んでくる星に飛び上がり拳を……

「アー」

やっぱり死にました。

十

真っ黒い空間。

死んだらここにくるのだろうか……

ただただ暗く肉体すら感じない。

手も足もある気がしない。

試しに手を動かして頬を触ってみる。

手の動く感じもしなければ皮膚が接触する感じもしない。

それ以前にこの真っ暗が、眼を開いているからか閉じているからかもわからない。

ただ、一瞬何かが光った。小さい小さい何か、

本当に小さいのかそれとも遠くだからかわからないけど何かがあった。

それを良く見ようと思えば思うほど光は大きくなってきて。確か

に見えた。

これは……私の羽？

このカノンである時の私の羽が光って、だけど燃えて見えた。

十

眼が覚めた。空中で星に燃やされたまま、私は死んですぐ復活したらしい。

私に当たったはずの星は地に落ちてまた新しい星が降ってくる。プラクティスルームでは嫌がらせに近い弾幕だと私は思った。なのに一度死んだことにより何か楽になった。

「使える……かも……」

そう私は呟き、目の前に降り注ぐ弾幕を……

ありえぬ速さで回避した。それも空中で！

「なっ！」

驚くライトさん。次々と降り注ぐ星を回避する。私の能力、燃える七色の宝石。これを使えば超最速加速が可能になる。更に飛行アクティビティを可能となり空高く舞い上がる。そして、

「いつけえええええ！」

背中は最大限にバーニングさせて急降下。そのまま拳を構えて、ライトさん目掛けてフライングアタックした。

しかし の形の盾が邪魔をする。しかしそれもキシキシと音を立てて碎けていった。

「なあ！」

驚きの顔が一瞬見えてそれから……

その頬に私の拳がぶつかり地面に倒した。

遠距離タイプの技はないけど近距離、加速においては最強かもしれない。あれほどのライトさんにダメージを与えられたのだから、

「いてて、一回死んだぜ。やるなカノン」

そういうライトさん。

「だったら、次は私の卑怯戦術でいくぜ！」

「ええ！」

十

指パッチンで閃光を散らす。

流石のカノンもこの光だけは回避不可能だろう。

それにしても、

「楽しいなあ」

当たりだ、まさしくこのカノン、もとい清音は当たりだった。今までこのSoultGameをやっていたのがもったいないくらいに、

いや、Soul+Gameがない状態だからこそ隠された戦法と知識、Soul+Gameの前段階が出来ていたのかもしれない。こいつは強い、弟子卒業も速いだろう。それよりも……

『魂の快楽を与えてくれる』

閃光で攪乱した再にも形をした物質の渦をたくさん発生させる。どこに私がいるかそれをカノンは探している。早く速く加速、アクセルして、その渦を次々に消していく。これほどの強者と純粹さ、突貫精神。ならば私も本気の一撃が必要だろう。そう、私は箒を召喚して上空で見ている。ただ見ているだけではなく……

「これが、私の最強だ！」

ミニ八卦炉にこのプラクティスで使用したと星の合計攻撃力を加算していく、密度を高め高め高め、必殺。『必ず殺す』程のSE OULが集まる。

「いくぜ！『StarLightBrake！』」

その声に反応して上を振り向くカノン。その顔が見えた瞬間に私のミニ八卦炉から光線が放射され一面が白く見える。

カノンは避けたか？避けられたか？そんなことはわからない。こんな簡単にやられるようなキャラではないだろう。

笑みはニヤケと変わり冷や汗を流す。顔文字だと（^- - ^:）な感じだ。

「うおおおおおお！」

カノンの声が聞こえる。それに私は驚く。生きていくくらい私は想定していた。ただ……声が……

「マジかよおい！」

私の光線の中から聞こえた。何が起きた、何が起きているんだ？わからない。そう思っていたら……

「アー」

あつ、死んだ。
無茶しやがって。

+

「うええ、まさか上にいるとはー」

プラクティスルームを出てまた私達は喫茶店にいる。出方はわからなかったけどライトさんの言う通りに退出をする感覚を想像しただけでもとに戻れた。

「というか、カノン。驚いたぜ、お前強すぎだろ」

「えっ？そうですか？」

「強いも何も全てのプレイヤーの中で初心者なのに真ん中レベルにいるんだぜ」

「ライトさんはどれくらいなんですか」

「中の上の中」

「アレでそれくらいのかとは……上位はどれくらい……」

「とと、その前にだ。お前って一瞬だけにせよあの私の最強技を止めたよな？どうやったんだ？」

「えー、とつさだったんで曖昧でまだ確証のある技じゃないのだけどね」

「うんうん」

「SpellCardを発動したの」

そう、私はSpellCardを発動出来たのだった……
それからしばらくお茶を飲みながら私達はログアウトした。

Seven Fire Girl (後書き)

この小説ではお金の単位は日本が標準になっているため『10,000』ではなく『1,0000』で区切ります。何故日本が標準かはまだ小説に記していませんがいずれストーリーが進むと記します。あと、このように現代の知識は完全に無意味ですので小説に対する現代知識での忠告はしないで下さい。

そんなこんなで黒清音、およびカノンの能力も覚醒。Spell Cardはまだどんなのかは内緒です。気になる所は内緒にしておけば読者は次回を気にするようになり信者に出来ると本でいえなんでもありませんよ

さつき私のいった言葉なんでもありません。
そんなこんなで、次回。フォルテが戦場に舞い降ります。

U r f a

【Are You OK?】

「OK、Let's Play Soul Game」

そう俺は呟きダイブする。

ダイブポイントは時計台の下、推測通りプレイヤー人口は異常なまでに多い。

今日の昼休みに送られたカードはもう懐から消えていた。

15分くらいで思いつく分は聞けたからまあいいか。とりあえずこの服を何とかしたいので俺は を貯めないと思う。いつそ課金すればいいのだが…… Soul Game を批判しながらこうやってプレイしていると清音にバレたらそれこそ社会的というか家族的におしまいだ。課金などリアルで目立つ行動は極力控えておきたい。

となれば Soul Game で対戦するか…… Soul Story System をするか、お店とか作って 稼ぎをしないとけない。

あーあ、本当に面倒だ。

しかし、何か気になることがあるんだ。ガラスを見たらあきらかに映っているのは俺。すなわちこちらの世界にも奴は、そっくりな形でいるわけだ。あれからどう探しても見つからなかった少女。名前すら解らない。ただこのゲームをしていることは確か。何故俺にこのゲームをさせて何がしたいかを俺は知りたい。ただの興味本意だがその本意は止めれるものじゃない。

しかしまずは服装服装、対戦が出来る場所に行かなければならぬのだが……

って……

「ん？」

誰かが真っすぐにごっちに来ている……

……

……

「あの！」

「え！俺！？」

まさか俺に話してくるとは……

どういうことだ？

紅と白い服なのだろうがどうやら動き辛そうな服を来ている……
腋が見えるな……

男の癖に後ろの髪をリボンで束ねている。

そんな奴が俺に何を聞きたいというのだろうか？
そう思うとそいつは眼を輝かせながらいう。

「き、君はしよ、初心者かい？」

なんだ、この服だからそう思われたのか……

「だったらなんだっていうんだ？」

ぶっきらぼうに俺はいった。するとそれにそいつは喜んだように
こういった。

「賭け試合に出てみない？」

「は？」

「というわけで、100 渡すからお願い！出てくれ！」
「いや……というかここまで連れてきてからという言葉か？」

「というのもいきなり首元捕まれて変な闘技場に連れてこられたのだ……」

「どうやら賭け試合でデスマッチで誰が勝か を出して賭け、見事的中させればいいだけみたいなのだが倍率があつて、今までの魂の記録によつて倍率は変わるみたいだ。則ち……コイツは……」

「頼む！君が勝つたら君も儲かるんだからね！ね！」

「そう、俺のような初心者に金を注ぎ込んで一発狙いを考えているようだ。」

「というかそんな賭け方じゃなくて一番倍率が低いのが選べばいいのに、それを選べないから駄目な人間が出来るんだよねー。」

「しかし、まあせつかくだし別にいいか……」

「わかった。」

「ありがとう、それじゃ受付にいつてきて。えっと……」

「フォルテだ」

「あつ、うんフォルテちゃん」

「ちゃん付け止めろ」

「うん、僕はオルファ。よろしく」

「コイツ、マジでとんとん拍子だな。まあ別にいいが……」

「と、というか初心者が勝てるのかこの闘技場は」

「というか初心者の基本こないし来ても誰も賭けないからねー」

「お前は本当に阿呆だな、それで俺が勝つ可能性があるというのか？」

「でも、そうしないと食費が……」

「食費？」

「うん……食費」

「……」

「……」

まあこのゲームをしている人にも色々あるのだろう……
というかだ……

「俺は戦い方すら知らないのだが……」

「そんなの、やってみればいいんだよ。そして勝ってね」

「速答で無茶振りだな……」

まあ戦いなんて現実世界での喧嘩と一緒に思えばいいだろう。

まあこの俺の翼……飛行スキルはないみたいだし、今飛ぶこともできないしな。

特殊能力やSpellCardがあると白いカードに聞いたけど、
自分で確かめてといわれたし……

まっ、いいか。

「そろそろ、始まるよ」

「ああ……というか」

「？」

「お前の正確……レアだな」

U r f a (後書き)

色々あつて一応投稿。

本日は少ない少ない。

ちなみにオルファは霊夢です。

そして霊夢を最強にするような設定を作っていたら……

アクセラレーターになりました。

パネエ！

でも大妖精には敵わない！

則ち大妖精はアクセラレーターよりも強いです

次回、無双です。

Brain Trick

白い箱の中に俺は転送された……

俺だけではない他の三人も……

一人、女で……二人男か……

どうやら賭け試合で戦う相手らしい。

そんな時に上の画面に倍率表示が起きた。

| | |
|-----------|-------|
| Night | 1.5 |
| Forte | 300.0 |
| Demitasse | 4.3 |
| Hill | 1.5 |

圧倒的だな、と思う。

初心者というか初バトル。女。こんな服。

まったく当たり前といえば当たり前の倍率だな。

それより……二人同じ倍率ということはこの……ナイトとヒルという奴は互角に『強い』ということだろう。

それにナイトという奴は、金髪にサファイアの瞳をした女。手には黒い指しグローブ。しかし動き難そうなロングスカートをしている。

見るからに強そうだ。

ヒルという少年に近い青年。確かブラックスミスと言われる最強プレイヤーと同じタイプをしている。いや……同じアバターなのだろう。

この倍率を見て賭けをする奴らへの賭け時間終了のカウントダウンが響いている。

そういえば俺も自分に受付の時に100を払ったらしいから勝利すれば30000になるはずだ。まあ、無理だろうが……

賭けのカウントダウンが終了したのか俺達の身体が青色に光だす。丸で寝ている時に起きる落下の感覚みたいなものが俺を襲った。落ちる、墮ちる、墜ちる。

その中で聞こえた。一つのノイズ。

『Lady Fight!』

それは戦いの始まりだった。

十

『狂気の瞳』 Invisible Full Moon』と
視界に文字が一瞬映り流れ出したミュージック。

ステージはサイバーといえはいいのだろうか。科学世界の最終点
みたいに見える状態。輝く研究施設のような所だ。

俺の周りに敵は見つけない。

デスマッチというのなら俺は最後まで生き残ればいいだけだろ
う。わざわざ敵を捜す必要などない。

とかそんな妄想は一瞬にして砕けた。

ドサッ

空中から何か降ってきた!

それはデミタスというプレイヤーだった。

地面にぶつかるや否や腕がせんぎれ、ポリゴンとなり消失する。
そしてその上に落ちてきた一人の少女。ナイト。

「チェックメイトよ」

そういいながら何処から出したかわからないスピアで敵を貫いた。目の前でそのプレイヤーは粉碎しポリゴンとなって広がる。全くついてないな。こんなにも勝負は速く着くのかよ。目の前に映るはナイトという少女。そんな俺に響くもう一つの足音。

「もう一人死んだか」

そう後ろの奴はいう。

少女は無口で俺とそいつを見る。

「まっ、勝利は俺かあんたに決まっている賭け試合だからな。てなわけでお前はさっきの奴でSleep Pointを稼いだんだ、俺はこいつで稼がせてもらうぜ」

そういいながら俺をそいつは見た。こちらを向く少女は何も話さずこちらを見ていた。

全く冗談じゃない。しかも100%勝利宣言かよ、もしかしてこのBGMは無敵BGMか何かかよって思うぜ。

「さて、初心者君よ。いきなりだがいたぶられてくれ」

そういいながらヒルと言われる男はこちらに飛んできた。それも凄い速さで！

しかしあくまで凄い速さ。

俺は軽く拳を握り締める。そして！
突き出した。

拳は見事に敵の頬にあたり吹き飛ばす。その際に説明にあった通り Spell Point が蓄積されたような不思議な感覚がする。それにしてもやはり身体能力が格段に上昇している。俺が生み出した格闘技さえもこの世界では一つの最強であるのだろう。現に……

「な、何が……何が起きたというんだ、」

そう、敵は倒れながらカウンターを喰らったことさえも気がつかず混乱をしている。

この世界の能力が何なのか知らないがこの身体能力でもカバーできそうだ。

しかし……

やはりどこかに欠陥が生まれるだろう。本当の俺の能力……まあ今回はこの格闘技で勝つとするしかなさそうだ。

俺は拳を握り締め男を睨む。その男の顔は恐怖に歪んでいる。無理もない、弱いと思っていた奴に、初めて戦いをするような奴がしかも女が意味不明の技を使って来たといったらそれは恐怖だろう。脳裏にすら潜まないこのリアル。ただ……奴のトドメは……

「がっ　ぐがあああ！つああ……あ……あ……」

そういいながらのたうちまわる男。女の方を見れば何やら手を男に向けていた。そしてそれを上に上げたとき。

男の首が跳ね頭と体に分かれた。その切断部分からポリゴンとな

り消えていく。いやぁグロかったな。

というかこの女はマジで強そうだ。さっきの男の倍率と同じなんて信じられない。

多分強さと別に女だからというだけで倍率を高められたのである。何せ俺の倍率も異常なまでに高いから。ギャラリーからしたら狂わせの賭け試合だろう。

まあこれは負けるかも知れないな。だが、勝つために戦ってやるさ、

そんな俺に彼女は囁いた。初めて聞こえた彼女の声はハーブの音色の様に清んでいて、しかし何かを吸い取るかのような音をしていった。

「その戦い方……」

戦い方？俺のか？

「ムカつく」

「……」

「……」

ま、まあー

「確かに酷いかも知れないがそれはないんじゃないか？俺は初めてバトルしているんだ」

手首を捻りながらいう。しかし彼女はその答えが間違っているかのように続きをいった。

「似ている……あいつと」

「あいつ？」

「不規則な戦い方、彼。ブラックスミスと」

ブラックスミス。確か学校のモニターで戦っていた奴だったか。謎の能力を使う。時系技らしいが今だに謎に包まれているらしい。不規則というのは先読みがしにくいことだろう。しかしだ、

「何故それだけでム力つくんだ？」

「それは……」

「？」

「それは私の専門分野だからだあああ！」

その声と共に地面が砕け石などが空に浮く。

サイバーステージみたいな場所だけあって石についたラインが高熱をおびたかのように光輝いている。

その石が俺目掛けて飛んでくる。

8個。その打ち5個を避け2個を打ち落とし1個は肩にあたった。熱さが肩を微かに襲う。しかしそれだけではなかった……

「ガッ！」

いきなり後頭部に飛んでいったはずの石が戻ってきて直撃した。

脳が揺れながらも俺は体制を立て直し跳躍して距離をとる。

何故飛んだあとの石が戻ってきたのか？能力は浮遊スキルか何かなのか？

最初のキルもそんな能力を使っていた。ならばさっきのヒルという奴はどうだろう？あの瞬間に首が跳ねたのは首だけを浮遊させたから？いや、違う。だとしたら確率としては……

俺は地を蹴り、敵との差を広げる。接近しか出来ない俺は何故距離を広げる必要があるのか、もしこの勘が外れれば負ける確率は高くなる。それも確実なものに……

敵が明らかに石を飛ばすかのように指を動かす。

石の軌道を先に読み、横に早めに回避する。しかし石はホームイングを行いこちらに向かう、その瞬間にその石を狙って俺も石を投げる。投げた石は微かに外れた、しかし途中でその石は何かに触れたかのように揺れて落ち、宙にある石が大きく跳ねた。

予想通りだ……………

跳ねた石はまた体制を立て直し特攻してくる。しかし石の軌道は読み辛い。しかしだ！大胆は勘でわかる。指の動きと地形の柱や鉄柱の微かな軋みに見えない光のLineを思い描く。そう、彼女の能力、それは……

『Wire Action』

しかしこのワイヤーが厄介なことに肉体での接触が不可能みたいだ。あくまで光の線であり見えないトリック。しかし生態物、いやソウルの実態ではないもの、ステージには引っ掛かるその見えない光。ステージの音がヒントを能える。

大地を感じる武術の聴覚もこの世界ではさらに高く感じる。空気の揺れすらわかるほど体感は上がる。

六感。三心。浄と染。三刻。合わせ、この108の心情感覚の上がりが強く感じるこの世界。

私は拳を握りしめ、更に力を注ぎ大地を蹴る。石の軌道を完全に読み、敵の懐まで入り込む。

「はぁぁぁぁぁー!!」

大地に踏み込み振動と拳を合わせた格闘がその腹部の打ち抜いた。

Brain Trick (後書き)

ナイトはアリスですね。まだ現実世界の名前は後にしておきます。まあわかつている人もいますが、

人形を使わせた戦いもよかったですのですが、バランス的と後からの活躍の為に少し弱く設定しました。まだSpellCardを使用していないために結構な強さを持っていますが、

またナイトはワイヤー以外の能力を持っていますが賭け試合では使わない様子。

お得意のブレインは次回かその次に！
それじゃノシ

B l e e d

確かに俺は拳を決めたはずだった。
しかしその拳が敵の目の前で止まっている。

「なっ！」

さっきまでなかったはずの黒い細い線が彼女の指一つ一つから形成されており計10本の線がクロスして彼女を守っている。

その線は俺の腕に絡み付くかのように回ってきたので俺はすぐさま手を引き回避する。

「残念だったわね。ここからはずっと私のターンよ」

そういう彼女。少し距離が開くだけでもう黒い線は見えない。これは能力じゃない。だとしたら……

「SpellCard……」

そう呟く。

「あら、正確よ。察しがいいわね」

彼女の解答が帰ってきた、やはりSpellCardか。しかしだとしたら時間切れをまてばまだ戦況は立て直せるはず、しかしその考えを彼女は打ち切った。

「時間切れを待っているんじゃないかしら？」

「!?!」

「凶星のようね。しかし無駄なことよ」

「……その前に死ぬってか？」

「いいえ違うわ。私のSpellCardは……」

彼女は口に笑みを見せながらいう。

「時間切れがない」

「そ、そんなばかな！」

しかし本当がどうかはわからない。そもそもこんなことをあの時の白いカードに質問していない。だとしてもSpellCardの花。枯れるのが当たり前だと思っていた……

「私のSpellCardは、産毛ぐらいの細さのワイヤーを形成すること。絶対に切れない。また、貴女は気がついたようだけど私の能力のアレと違ってプレイヤーに触れる」

彼女は指を動かして空に浮く。多分ワイヤーを繋いだのであろう。

「SpellPoint消費は激しいけど、時間は無制限。私は最強って訳」

俺は息を飲んだ。強い。魂の世界の癖に冷や汗の感触が俺を襲う。ちらと地面に影が見えた。まさかと上を見たら天井が砕けて白い瓦礫が落ちてくる。

俺は地面を蹴りながら回避をした。しかしその瞬間にワイヤーが俺の腕に絡み付いた。

「やべっ！」

そう喋ったのもつかの間。俺はワイヤーの軌道により地面に引き連られる。ワンピースの布地が破け下半身の半分からショーツが見え隠れする。

途中途中で地面に転がる石が体にぶつかり微かなバウンドがおこる。

痛みが体を走る。

その中で何かが体に宿った気がした。

+

ここは、どこだ？さっきまで俺は戦っていたはずだ。

一面を見ると丸で黒い世界。その中に淡々と広がる紅い棒。

液体のような固体のようなその棒にあるかないか知らないが俺は手を伸ばした。

掴める。握れる。それは熱くそしてしっとり来た。

俺にあつた触り心地、重さ、そして！

その棒は俺のソウルに響くかのような武器へと変動をする。

魔餓魔餓しくそして清楚でもあり、純粹でもあるそれは、とても残酷でそれでも全てにおいて最強に思えた。

SpellCard

俺のスペルカードだった。これが俺のスペルカードなのだ。

すなわち俺の『Spell』そのもの、魔力、魅力、能力。それは深さをしみつけた最良の力。

『Bleed』だ

俺は引かれている腕を無理矢理に引き抜いた。俺の腕は微かに切れてポリゴンではなく紅い液が滴り落ちる。

どつりで痛みを感じる訳だ。痛覚や感覚を味わうには何より血が必要となる。その成分が神経を働かせる。ポリゴンになる肉体と違い俺には痛覚を感じる。すなわち血が流れていたのだ。

俺の能力は血。ただそれだけ。その血には深い意味がありそうだが、

それにしても相手もビックリしている。何より血が流れているキヤラなんて初めてだろうからな。ゲームでいえば制限かかるだろうし、

それにこつからは俺のターンだ。
発動する。最強のSpellCardを。

「Heart Brake!」

現れたのは紅い球体。それを握った瞬間に形が変わる。

上に三角のような形をした刃。持ち手は棒。

しかしそこに見える紅い液のうごめき。ルビーが光りに曝されているようにも見える。

その簡単にいえば槍を俺は構えた。

足を固まった血が固定する。丸で俺は固定砲台だ。

「SpellPointの八割を使用して使う大技。お前は避けられるか？」

そついいながら俺は槍を投げ飛ばす。

直線に速く速く飛んでいく。しかし相手はかわせる速さだ。

むろん彼女は避けようとした。しかし、

「なっ！」

体が上手く動かない。いや、ワイヤーの着いた指が彼女の動きを邪魔した。

俺の血が着いた一つのワイヤーが地面に凝固して彼女の動きを瞬だけ鈍らせたのだ。

しかしその一瞬が命取り。俺のその槍は彼女の体を突き刺した。

「ぐっ……」

苦痛に歪んだ顔を見せる、しかし彼女は笑ったような顔を見せた。

「倒せなかったようね」

そう彼女はいう。確かにさっきの一撃で倒せはしなかった。そういう能力だ。

「私の勝ちよ！」

その声と共に体に纏わり付いたワイヤー。

しかしだ、それは腕で振り払える。

「いや、負けだよ。お前のいうブレインの差でな」

「な！」

「SpellCardの時間切れだぜ」

そうSpellCardの時間切れ。彼女はそれはないと言っていた。だが、そんなことはある訳がない。なぜなら、『SOULS

tory System』。この何年とも上限がない世界で一度使用したら永遠に使えるという訳だ。そんなの華でも何でも無い。

更に彼女は頭脳に走り過ぎた。

ワイヤーはプレイヤーの肌に触れることはない。

なら何故あの男は切断を喰らったか？スぺルカードのスキルも無しに。

ワイヤーを服の上から与えた圧力。更に服の耐久が高ければ結果服に切断される。

普通の耐久なら人を飛ばすくらいしか出来ないだろう。最初のあいつみたいに。

なら私のように破け安い服ならば、

ワイヤーは服を破き肌に触れ力を発揮しなくなる。

だからこそ俺にいうしかなかった。

このスぺルカード。制限無しのワイヤーアクションのごまかしを。頭脳戦闘つてのが得意分野か何か知らないけど俺に勝てる訳がない。何故なら

「俺の脳には血が流れているんだぜ、そして。チエックメイトだ」
「え？」

その瞬間、彼女の体が爆散した。

いや、心臓付近がかな？

俺のスぺルカードはハートブレイク。

必殺のハートブレイク。

必ず殺す一撃奥義技だ！

そして戦いのBGMが停止し目の前にWinという文字が現れた。

B l e e d (後書き)

この小説では矛盾やおかしい点に乗せています。

この矛盾に気がついた人は多分少なからずいたような気がしました、

これからもこんな感じな戦闘を書くかもしれないので矛盾に気がついたら感想とかに書いて下さい。

因みに今だに誰も気がついていない矛盾点がいくつかあります。

感想お待ちしております

G o s h o p p i n g

「……………どうしたんだ？」

そう俺はオルファにいう。因みにさっきあったばっかのやつだが
対して気にしない。オンラインゲームだってそんなものだろう。何
やらこいつは体育座りをしていた。

「1000 が消えた」

「は？」

何言っているんだコイツは？消えた？バグか？

「1000 をナイトに賭けちゃったああああ！うわあああああ
ん」

「……………」

……………あ、

「えっと、だな。何故ナイトって奴に賭けたんだ？」

「だって今まで彼女が負けた所見たことなかったから」

「すなわち俺が負けると思っていたわけだな」

「……………ゴメンナサイ」

「いや、まあいいや。それじゃ」

「待ってええ！」

スカート裾を掴まれた。バトル終了したから回復した服といえ
ど掴まれたくはないものだ。しかしまあ服が買えれば別にいいし、
一応 も貰ったんだし。恵んでやってもいいかなと思う。

「とりあえず、服を買うから……感想でも聞かせてくれたらやらないぞ」

「お金？」

「お金」

「乗った！」

とてもいい返事が聞こえた。まあ、いつか別に。対して 道の使い道なんてわかんねーしな。

十

「なあ、この服はどうだ？」

俺は黒がデザインの服をオルファに見せる。

さすが魂の世界であって着替える必要はなく試着しようと思った
ら体を光が包み着替えが終わっている。

こんなアニメ、昔あったな。

俺達がいる店は洋服店。防具店と違って耐久性よりファッション
の数が多いみたいだ。しかしほとんど防具店と数は変わらないので
普通は防具として服を買う人がいる訳だが、俺は服つてのは破けた
りする方がいい様な気がする。

現にあの戦いでは服が配給物の弱い服だったために相手の戦い方
を不可能にしたやり方で勝てた。

それに俺の能力だと怪我したほうが開化するようなので耐久性が
ない服を買う。

それにしてもこの服カッコイイよな、ブラックってイカスぜ。

オルファの反応も……

「うん、可愛いよ」

……………ぞくつ。

やべえ俺はその言葉に寒気を感じる。可愛いかこの服？

うん、じゃあ。

「これならどうだ!」

ピンクのパーカーにスカーレットの鎖がペイントされた服に軍事スポン!これなら勝つる!

「こつちも可愛いね」

ぐはー!

何だこいつ、俺のファッションが可愛いだ!?!どんな頭してやがんだ。

「?」

まあ賭け事で自分でいって違う賭けをして負けた馬鹿だ。そつとう貧相な頭脳なのだろう。

「この服は!」

「可愛い」

「この服は！」
「セクシー」
「どっこが!?!」

「このぶ」
「可愛」
「ry」

「この」
「可」
「ry」

「k」
「ry」
「ry」

どれくらい服を試したのだろうか？

世紀末な服でさえ可愛いだ。もはや有り得ないを越えて異常だ。

ちなみにセクシーといわれたのは、12月24日と25日の境界線に真っ髭を生やして赤い帽子を被って、配管から払われる。ユ-

スケ・サンタマリオと言われるといわれる人のコスチュームだった。何処がセクシーか聞いたら胸が強調されて無乳の膨らみが見えるあたりがと言われた。まあ気にしない。

「と、いうかじゃあお前は何かカッコイイと思うんだよ！」

そう私という。今まで可愛いとかいつてきたんだ、相当カッコイイのを選べるのだろうコイツは、出来なかつたら はやらん！
そんなことを俺は思っていた。しかしそれがいかに間違った行動だったか今にして解った。

こいつの選んだ服は……………

「な、なんだこれ？」

「ん？ドレス服だよ」

……………え、これってカッコイイか？

薄い紫をベースにした地味といえば地味でパーティーではなく家の私服みたいなドレス。下着は、まあドロワーズ。ドレス専用といえば専用扱いが……………

それに何故か帽子みたいなので……………

まあ確かに俺には髪の特徴がなくて地味だけどさ……………

改めて自分の体を三者視点で見る。カッコイイって訳でもないが、可愛くもない。

というか一応女である私がカッコイイ服や男みたいな服を着たら可愛い扱いになっているのかもしれない……………

つまり実際この服で正しいとも思えてくる。

しかしスカートねえ、スカート。これだけは履きなれないから嫌なのだが……………

……………もしこの世界で清音と出会うことがあってもこの姿だけは見せた

くないな……

まあ、清音と出会う予定なんてないし今はこの服でいいか。

そして俺はこの服を約5000で購入した。安物ドレスだったがこれって高い？安い？まっ、どちでもいいか……

十

「……………でだ、何故こちらでメシを食う必要がある」

そう俺は俺の残り残金を全て手に入れた男にいう。どうして無駄遣いをするのやら……

しかし簡単に彼はいう。

「ん？知らないの、こちらの世界で食べても現実世界の腹は満たされるんだよ」

「……………は？」

ドコトみたいな顔を俺はした。

「まあ原理はわからないけどこちらの方がご飯美味しいしいじゃない」

「いやいや、確かに体の体感的に満たされるかもしれないけど本当の肉体に食が通らないからすぐ空腹になるんじゃない」

「それがならないんだよね。最先端技術って奴？」

「どんだけ技術進歩してるんだよ」

「過去の生物は何も食べなかったという説もあるけど」

「シヤカになる為の歴史説だっけ？昔の世界なんて未来をみて歩む俺達現代人に付与だからあんまり知らないのだが？」

「まあ、僕も調べても説ばかりだけどね。一番面白い説は、人は土が神の力により人の形を作った。神は見えなく音もなく何かを魂に囁いた。そんな説があつてね」。僕達の世界もそんなカリキュラムで作られているのかなーって」

まあ確かに過去にはあんまり触れてはいないが……
このゲームには過去も少しは関係するのだろうか？

一応俺のわかるこの年代3011年の基準は、0年の人が神となつた日と言われているが。対して関係ないだろう……
それにしても……

「美味しいなコレ。何なんだ？」

「すき焼きだよー。こちらの世界でしか食べれない食品さー」

「？」

「牛肉つて知ってる？」

「牛肉？現代では肉類は消されてるんじゃない。確か昔に食品問題となり生物系食品で発症可能性がある生物を全て根から消し去つたというのがあつが……それがこのゲームに残っているというのか？」

「まあ残っているは残っているんだよね。この世界では病気なんてありえないから大丈夫なんだし、それに。この世界は0年から約2000年の世界を元に作られた見たいだよ」

ということとは、今まで見てきた派手な服や動きにくい服などは昔の人が着ていた元をメインに作られていたのだろう。昔の人は何故自分の頭に獣耳を生やしたかったのだろうな。

店にたくさんあつた。あと二次元I Loveと書かれたシャツとか……

さらに驚いたといえば……、何か俺にそっくりなでも生意気そうな奴がプリントされてた服があつたな……

確か名前は、『レミア・スカーレット』

昔の人はどんなネーミングで付けたのだろうか？レミリアはどこぞのマヨネーズの名前だしスカートレットは深紅。深紅のマヨネーズ？……もしや裏をかいてケチャップとか？
とまあ、そんなことはどうでもよく俺はすき焼きとやらをオルファと共に平らげた。

十

「……………」

感じた……………」

この感じ、貧相ただようそこに含まれた一つの天才。
彼の隣には一つの運命の線。デステニーライン。

「シナリオが出来ているわね」

そう私は呟く。

全てを知るこの能力……………」

7魔法の力……………」

さて、オルファはシナリオに入れられたみたいね。

薄々感じてはいた、彼にあるその博麗の巫女と一致する貧相と天才。

シナリオに行く才能。運命との出会い。

消えなきゃいいけどね。オルファの隣にいる運命のカリスマ。

名前は、F o r t e …… フォルテか。

レミリアとのシンクロ率は最低ライン。

さて、どうなるのやら……………」

「さて、そろそろ帰ろうかしら……彼の寝顔も見たいしね」

そういつて私は本を閉じた……

十

「にしても……高いんだな。すき焼き」
「まあね。でも美味しかったでしょ？」

まあ、美味しくはあったが値が値であり、1500。1500
0円だ。

今まで俺や清音が食べてきた空気微生物凝固食物は300円。まあ味は微妙で水分が欲しくなるが、この金額。俺と清音はクローン人間で二人暮しとされただけあって、クローン人間一人に月15万円配給されたとして、二人で30万の配給。

土地、家、最低限の生活費は一人あたり7万。清音と一緒の家、土地だから4万引いて。二人で10万。

二人の月食費4万。二人の学校月費用2万。引いて月に二人での残りで自由に使える残金は、14万。

それなのにこのすき焼きという食べ物簡単金に金を奪っていった。このSoul+Gameでは課金する人口が多いらしいが。一種の麻薬みたいなものがあるのだろう。

何せあのすき焼きというものは、今まで食べたもので断トツ一番をとれる。

多分清音が食べたなら普通の食事じゃ満足できなくなるかもしれない。
い。

それに魂が奮える。

今の世界を比較してみよう。

今の俺達がいた世界でのスリルとはぬるきもの。規制があり、当たり前で同じものを感性と受け。何より日常を娯楽として感じていた。

稀にあるお祭りを最大の娯楽として俺達は感じている。

お祭りはたまにあるから面白い。飽きてくる。そういう言葉がある。

いや、それは違う。

お祭りは毎日続けばお祭りが無い日が悲しくなる。すなわち中毒性を出させない為に適度に感覚をあけているのだ。

昔の遙か地球、0の世界説。『ローマの強欲』という本。それにはこう印されていた。

権限を持つ者は一日に奴隷10人の死ぬまで対価を使う。それが1000年続かないというだけで死ぬ権限者もいた。故に、贅沢とは一つの毒であり、精神の治らぬパルプに過ぎない。

そう、魂がこの世界に飲まれてしまう。

俺は全ての をオルファに渡したから今はないが、この幸福を手放せれるだろうか？

現実の10倍の対価をする金。

しかしこの世界は現実の10倍を超える良世界。

俺は……

「魂には逆らえねえな」

そう呟く。

「なあオルファ。頼みがある」

「何？ なら返さないよ」

「そんなことじゃないさ、それよりまあなんだ」

「？」

「この世界に気に入った。まだ俺は余りこの世界を知らないし、――

緒に回ってくれないか？」

そう、俺はいう。別に特別な意味はない。俺の嫁は清音一すG）
ゲフンゲフン

まあとりあえずこの世界を楽しみたいのだ。

「……………」

しかしオルファはやけに黙っているな？

「どうかしたのか？オルファ？」

「え、いや……………」

「いや、なんだ」

「えつと、デートの所望？」

……………はあ、まったく男ってやつは……………

「まあ、それでいいか」

十

「博麗の巫女……………」

そう一人の少女はいう。

紅の服、黒き紙に微かに焦げた茶の瞳。その和を感じさせる少女は、こういった。

「博麗を狩って、更に力を……」

Contact

「あ、お姉ちゃんオハヨー」

朝起きて元気よく挨拶する私。

「ああ、おはよう。清音」

いたってノーマルな返事をするお姉ちゃんは私はいう。

「あのね、何か朝は食欲ないからご飯はいいよ……」

というのも、何故かゲームの世界で食べた食事で現実も胃袋が満たされたから……

といったらお姉ちゃんら多分連続チヨップで説教が始まるので言わないに限る。

でも朝起きたばかりの歯は汚いのでちゃんと洗うとしよう。

私は洗面所でコップをとり浄水と言われるレバーを引き水をだす。それを口にいれうがいをする。昔は歯についた歯垢をブラシで磨いて落としていたし赤ん坊もそうしているのだが私達の歳になると浄水で菌だけを溶かすことができる。まあ飲んじやったら医者に見せないかね

そんなこんなして私は身支度を自分の部屋でする。

服をきてー。髪を解かしてー。リボンで金髪の左サイドを結ぶ。準備完了はしたが……

「これ？どうしよっか……」

私はギアを持って考えた。持っていく、持って行かない。まあ簡

単に言えば、お姉ちゃんに見つからないように持っていく、お姉ちゃんに見つからない為に持って行かない。って所だね。

「うー、迷うなー」

光と昼休みにやりたいけど、お姉ちゃんも一緒ならアレだしな！。

「よし！」

そう決意して私はギアを押し入れの自分の下着入れに隠す。流石にこれならバレまい。

私は玄関に走っていく。当然ながらお姉ちゃんもゆっくり私の後ろについてくる。

「あ、あれ？お姉ちゃんはご飯は食べないの？」

お姉ちゃんのことだから持ち運び用の食事、空気タンパク質から出来たカロリーメイトとか持ってくると思ってたけど。

「ああ、どうせ速くいっても学校が始まるまで暇なだけだ、購買部で何か食べる」

そういつてマネーカードをピラピラと私に見せる。ちなみにこのマネーカードは持ち主DNAと共鳴しないと起動しないために盗んでも無意味である。同じ姉妹といえども共鳴はしない。いや、私が試したんじゃないくてね。お姉ちゃんに試されたのだけど、

そう一人心情ツツコミをしていたらお姉ちゃんが「何やってんだ？」みたいな目をした、そして「ああ、いつものことか……」みたいな顔をしたので軽くシヨックを受ける。

10分後学校について校門奥のモニターに目をやる。

「朝から中継されているんだね。」
「そうみたいだな」

というのもSoul+Game。魂の試合だ。

「この学校の生徒でいい戦いを流しているらしい」
「そうなの？」

私は首を傾げながら聞く、

「まあ、強いイコール精神的なものがあるからじゃないか？ 見てる側もテンション上がるし」

「ということは、目指せって学校の暗示なのかな？」
「さあな、」

と返事したお姉ちゃん。そしてモニターから目を離しお姉ちゃんを見た。

十

「あ、お姉ちゃん？」
「どうした、清音」
「その腕どうしたの？」

そう清音はいう。清音が見ている右腕を見た。なにかで縛られたようなあとがたくさんあった。

「……………なあ清音」

「お、お姉ちゃん？」

「寝ている間に俺に悪戯でもしたのか？」

と試みてみた。妹が信じられない訳ではないが、昔にそんな記憶があったのだ。だが清音は頬をぷくつと膨らませこういう。

「心配して質問したのに犯人扱いって！お姉ちゃん酷いよ！」

まあちゃんと考えたらすうですよね……

うるうると目に涙を浮かべた清音の頭に手を置いて、

「ごめんな、まあ何故こうなっただら？」

と呟いた所で誰かが俺の腕を握った。

「えっ」

と、そうアホげな声を上げたのもつかの間。

「ちょっときてー！」

「あ、ちょちょちょ！」

ぐいつと腕を引かれて体がこけないようにと歩いてしまいその声の主についていく。声や体格的に女な訳だが、何やら周囲を警戒して歩いている。背後で「あ、お姉ちゃ……」「という声とその後には「まあ、いろいろあるんだね」と順応ある返答。さっきの仕返しか！？とりあえずこの警戒するかのように俺を引き歩く女だが、金髪にどうやら女らしいが丈が長いスカート。それもベルトで止めるタイプのどこかの魔道師を連想させるかのような少女だった。

ということはこの人はちょっと危ない人で俺を百合対象に見ているのかもしれない。ソクツと寒気がしてとりあえず話をかけようとしたときに彼女は止まった。

とりあえず俺は自分のいる場所を確認するために周りを見渡す。どうやら学校の食堂みたいだ……。周りにはいろんな人がいるが会話が聞こえない。この学校で食事中に会話しても机の周りには響かないようにこの部屋自体が微かな振動をしており音が広がらないのだ。すなわちここは学校で唯一の音が広がらない部屋なのだ。まあしかしこの食事は腹が膨れるだけで美味しくないと評判なのだ
が……

しかしここにつれてきたのはどういうことだろう？家庭事情で金が足りないから朝ごはんを要求する……。ような人柄には見えないし、やっぱり告白か！

「何、引いてんの？」

と、ようやく相手が声をかけてきた。顔を見れば水色の瞳で白い肌。頬は軽く朱色。まじまじ見つめる俺に彼女はいう。

「確証せずに相手を見ても無駄だわ。ナイトってプレイヤーよ」

と、彼女がいった瞬間にあのゲームキャラの記憶が蘇る。確かカードがいった現実と魂で認識しているプレイヤーは両世界で確認できるというのはこのことだろう。しかしコイツはどうやって俺がフォルテとわかったのだろう？

「あの、……」

「ライン」

何かいう前に彼女は自分の右腕を指す。それは俺の腕のラインに

対するジエスチャーだろう。

「何故私が貴女を認識出来たかでしょう、そのラインは昨日の対戦で私がつけたものでしょう？それを探していたのよ。人物で認識不可でもそれ以外で認識出来るわ」

と彼女はいう。しかし何故、

「何故こちらの世界に傷がついているのか。貴女の脳はこちらじゃ機能してないのかしら？」

「ヒデエ……」

というかこいつがこっちの世界じゃキレてるだけだろう。

「血が流れてるって大切なんだな……」

「あの時は油断しただけ、血は関係ないわ」

「まあ、確かにそうだけども……て、お前は俺に何をいいたいんだ？その前に」

「前に？」

「お前誰？」

「貴女こそ」

「……………」

「……………」

なんだよこの沈黙は、仕方ない。

「俺は邪音。とりあえず口調はアレだが女だ」

「いや分かってる。」

「次、お前の名前」

「何故？」

「……………理由を聞く必要があるのか自称天才」

「冗談よ。それに天才じゃない。ジーニアスよ」

「ジーニアスって名前か？」

「名前はキシ。ジーニアスってのは様々な天才って意味よ」

あいたたたたー

「言っつて恥ずかしくないか？」

「どこが？」

「……………」

もう、何も言っまい。

「とりあえずお前は俺に何の用事だ？負けたからリベンジでもした
いのか？生憎だがギアは家にあるぜ」

というのも学校に持って行って清音にバレたら面倒だからだ。清
音が心配だったと言ってシスコンと思われ退かれるのも困る。だが
このキシという奴の言葉は違った。

「貴女は少なくとも頭脳スタイルで戦う力特化プレイヤー。今まで
見たことないタイプだわ。」

「なるほど、すなわち珍しいから会ったって訳だ」

「まあ興味がある訳よ貴女のプレイに。だから頼みがあるの」
「頼み？」

「はあ……」

そう、俺はその日の授業もキッチリと受け昼休みなどは書物を嗜み無事に帰ってきた。そしてすぐさま自室でSoult GameにLog inだ。

「しかし、フレンド登録つても面倒だな……」

と退屈そうに空を見ながらいう。ナイトが要求したのはお互いをフレンドにすることでその人の観戦ありの対戦をグラフィック化してどこでも見ることが可能な訳だ。ぶっちゃけナイトの攻略なんてワイヤー意識すれば出来るしナイトと戦う奴を研究するほど俺は暇じゃない。何のメリットもない訳だが……

「お待たせー」

「あ、あぁ」

このキャラの変わり用だ……。何が会ったかというと初めてフレンドが出来るから興奮してるのだ……

まぁ俺だって初めてフレンド登録するんだが……こいつとんだけ友達いなかったんだよ。

そういいながら彼女の顔を見る。いつもの顔とは違い無邪気な女の子のような顔をしていた。この顔さえあれば友達なんて何人も出来ただろうに……

まぁ更に理由はあるのだが……

とりあえず目の前にフレンド登録というアイコンが現れる登録を済ませる。するとナイトははにかみながらしかし冷静にいう。

「さて、それじゃあこのフレンド登録の理由だけど」

「寂しいからじゃないの？」

「別にあんたと友達になれて嬉しいなんてないわ!」

冗談にマジで天然記念物を見せてくれたナイトさん。

「ふう、とりあえず貴女に見せたいものがあるの」

「見せたいもの?」

そついいながらナイトは指を動かす。すると目の前に光る球体が現れた。その球体はユラユラと動いている。ナイトはそれを手に乗せながらいう。

「貴女私との戦いを覚えているかしら。その時に私がいったとある人の名前も」

「あ、ああ。ブラックスミスだっけ?俺と似た戦いをするという」

「自分が嫌になるけど、私じゃ彼には勝てないの」

「俺に負けたから?」

「いや、そんなものじゃない。圧倒的に違うものがある」

「圧倒的に違うもの?」

「とりあえず私とブラックスミスの対戦を感じてみて」

そついいながら彼女は球体を俺に押し当てた。

十

ステージは竹林。お互いに得意そうなステージだ。BGMは『エクステンドアッシュ〜蓬莱人』が流れている。開幕そうそう敵の索敵をする必要があるのだが、私のタイプだとワイヤーで竹を切断したトラップが有効だろう。

様々な思考を巡らして竹の切断後の落下ポイント、倒転ポイントを計算しワイヤーを巡らせる。強度は魔獣と言われるエネミーの髪の毛レベル（植物系に対してのみ強力なレベル）のワイヤー。

完全に資格はない。いかに最強といえど戦術とは相手の力さえも無効にできる。まるでローカルゲーム『チェス』でクイーンを追い詰めるかのようなやり方。負けない！

問題はこのワイヤーは相手が触れても私は場所を把握できる訳ではない。私に可能なワイヤーは最高10本。内に敏感な薬指と小指しかワイヤーの接触を感じきれない上に一本のワイヤー自体約20個のポジションを確保している。わからない訳だ。罠を発動するにも最終的には空気、音、気配で狙う他はない。肉眼など思考。速さが足りない。

私は目を閉ざし精神を研ぎ澄ませる。風が流れ額が冷える。汗が頬をつたる。それさえも瞬時に忘れ感じる。

一瞬の勝負。頭脳の活路。そうこれが勝つ為の道。
そのつもりだった。

予想外のアクシデントが起きた時の頭脳とは無に等しいもの。そう、いきなり上空からの襲撃だった。有り得ないほど連続で大量のナイフの襲来。

痛みでワイヤーは動き勝手に一面のトラップは動くが無意味。それどころか見渡しがよくなり敵からの見事な的となる。地面に倒れながら私はその相手を見る。本来空を飛べないタイプのキャラが空を飛んでいたのだ……

もう頭脳戦など無意味だ……しかし、最後にたった一つの望みがあるならば……

「Ca……Carbon Wire!」

そういつて腕を振るう。黒い炭素で形成されたダイヤモンドの強度をもつ最強のワイヤー。クリティカル、連続ヒット。それを狙う、正確に、確実に……

しかし私がスペルカードをこんなに簡単に使えたということは……私は彼の口元を見る。退屈そうにただ一言。

そして一瞬で私の目の前に降り立った彼は、銀色のナイフで

十

「っ」

さっきまで見ていた光景がすぐさまに戻り俺は目を閉じ落ち着く。

「っ、これは……」

俺はそう聞くしかなかった。

「私の負けた時の魂の結晶よ、値段は5000 としたけど。本来は私が勝つ瞬間をおさめるはずだったんだけどね」

「そうか……」

悲しそうに眉を細めながらいうナイト。だが、俺には疑問がある。それは……

「これを見て俺にどうしろっていうんだ？」

そう俺は聞く。すると彼女は唇を噛みながらこういった。

「戦ってほしい……貴女なら彼に似ている所がある」

「似ている？」

「相手の技をわかり、自分の技が相手にわからないという能力。さらに貴女は血が関係している」

「一応能力としては血が流れているというのだがな」

まあそれが俺の能力な訳だが血の固まりは自由だし形も形成できる。初見殺しで捕まえて一撃必殺というのも可能だ……

しかし、相手の技がわからないとその一撃はなくなり血も尽きる。体力の大量消費だ。

一回の戦いじゃ無理がある。それよりだ……

「俺はいつこのブラックスミスって奴と戦うといいんだ？」

そう俺は聞いた。すると彼女は顔に笑みを作りこういった。

「今よ」

Contact (後書き)

さて、ブラックスミスとの対決が始まる。しかし早過ぎる。だってフォルテは何かをやってしまったから

さあ、フォルテはブラックスミスの能力に気がつき勝つことはできるのか？

次回もお楽しみに

Question

永遠亭の大きな御庭。意味不明なステージに俺は送り込まれた。

BGMを見ると、『ナイトオブナイツ』と言われる曲が流れている。

この戦いの理由は俺がこのSoul+Gameで初心者のお癖に強者、ナイトを破ったことによりブラックスマスと言われる強さを求める人との対決を急遽決定されたのだ。まあナイト曰く、私に大金賭けた人の腹いせで無惨に負けてほしいだけらしい。ちなみにこのBGMの理由もナイト対するに腹いせだとか、

まあこの曲は格好よくていいけど……

『貴女！そんなにぼうけてると死ぬわよ！』

五月蠅いなあ……

何故ナイトの声が聞こえるかというと、ハンデとして魂の共有を認められたからだ。まあ一応俺の視界からしか世界は見えないし声の共鳴しかできない。余程俺達が負けるのを望んでいるようだな主催者。まあ普通はそうだろうけど……

「とりあえず、敵がくるのを待つか。それとも探すか。どっちがいいと思う？」

『私の時はすぐに見つかったし畏も回避されていた。全体警戒で力ウンターとかかしら』

ふむ、まあそれがいいか……。と思ったがつかの間。俺の近くをナイフが通った。

「おっと、カウンターの前にきたようだ」

すると空から銀髪の黒い服をきた青年がこちらを見ている。そして舌打ち。感情か……。早速嬉しいね。

『あいつがナイフをわざと外した!?なんで!』

「いやいや、わざとじゃないぜ」

『どういうこと?』

「とりあえず俺はナイフが初段になると予測して空気に微かに血の塵を含ませていた。個体は刃物の起動を微かにずらすと距離と数が重なれば当然外れるわけだ」

『へえ、二回目の戦いなのに勝負なれしてるじゃない』

というのも俺がゲーマーでゲーム適応が凄いというのは黙っておこう。

それにしても相手の能力は未だに不明。相手もこちらの能力は知らないはずだが、この戦いで相手の能力だけでもわからなければ次などない。この勝負で俺は必ず能力がばれるからだ。

俺は指に血を固めて爪を作りだす。ナイフがこの血より強度が低いのはわかった。結構強い能力ではあるが血は空気に触れないと固体変換はないので体内を斬られたらちゃんと切れる。それも他のプレイヤーと違いリアルでも体にラインがでるときた。まあ、怪我した時に脳が血を治癒の為に集める作業をするから。この脳のギアを使用したこのゲーム内での電波によって無意味に血が流れているだろう。

しかし、

「あいつ、動かないな……」

『基本そんな奴よ。敵を見下して自分からは攻撃しない。トリックはカウンターや不意打ちにしか使えないってのを物語っているけど、向こうから攻撃するってことはありえないじゃない。対象不可能って所ね』

「マジで面倒だな」

『そうね』

「だったら突貫するか？」

そう俺がいつたらナイトは溜め息をついて、『貴女馬鹿？まあ私は何も言えないし好きにきなさい』と言われた。好きにするさ。

俺は地面に重心を欠ける。バネ仕掛け式のジャンプ。翼あれど私には不要なわけでこの場合はこれしかない。相手がこないならこっちから。

そして……

「いくぜ！突貫だ！」

突き貫く勢いで俺は飛ぶ。彼の動きを完全に見るしかない。彼のトリック。すると彼は彼特有のキャラ能力、ナイフの召喚によってナイフを投げた。ようなモーションだったが投げられたナイフはその位置にあり俺がそのままいったら刺さるだろう。

しかしそんなの弾けばいい。特殊なプラスの力をもつキャラ。暗部、神主、妖精は防御は弱い。暗部は武器転生。神官は空中移動。妖精は自然スキルという珍しい力があるが、記録からして暗部系の一部と思われるし武器転生は一種類のナイフ。見た目はC U - B K 7であるう。入口というより軽量であり投げるなどで扱いやすいと有名なナイフだ。何を目的に作られたかは知らないが旧世界はこのような武器を使用していたのだろう。

そんなことを考えながら俺はナイフを右手の爪で弾こうとした。しかしナイフはその場で停滞したままで手にナイフが刺さる。

「いたっ！」

そして刺さった瞬間にナイフがその場所で回転運動を起こし右手

を切断しながら飛んでいく。

そして俺は地面の引力に引かれ落下運動を起こしていく。当然相手は追撃のナイフを投げてくる。俺は斬れた右手の血を剣状に固めでナイフを弾きながら落ちる。

ナイフを投げるにしても一本投げる度に0・1のタイムラグ。二本目の投げ終わりにナイフを召喚するのに0・5のタイムラグが発生している。

脳の回転よりも速くナイフがくることはない。俺は冷静にナイフを弾きながら地面に着地しようとした。その瞬間に、

「ふえ？」

地面がほげた。そして穴に落ちた。

「な、何が」

『バカ！ナイフが来ている』

「おっと」

俺はステップでナイフを回避しながら穴の底を踏み締めジャンプする。高速バック宙回転をしているためナイフは当たらず弾かれる。地面を確認するとどうやら落とし穴のようだ。

『これは、このステージ特有の落とし穴ね』

「他にもあるのか」

『ないわ。ステージに一つだけ。幸せの兎が掘った穴らしいから幸せくるかもよ』

「うん、嬉しくないな」

『それにしても』

「？」

『落ちるときの貴女の声は可愛かったわ』

「ほつとけい！」

とりあえず俺は、上を見上げる。まあ、無理とわかったらもう攻撃はしないみたいだな。スペルポイントは与えた側より受けた側が大きい。

すなわち俺の方がスペルカードを速く発動できる可能性が高いということだ。

相手のスペルカードが俺よりも低いポイントで使用できれば関係ないがスペルポイントの使用量とスペルカードの性能は比例するらしい。

例で月の妖精、のミュートシステムが相手の視覚を一時的に消すのには上限の2割程度で使用できる。

しかし俺のように座標移動されれば当たらないし隙だらけな技だが、当たれば一撃。この必殺だけでも8割を使用する。

現在俺は4割を手に入れている。ナイフのダメージで2割。弾きで1割。落とし穴でダメージは受けたが1割。体力はまだまだ死なないし十分だろう。

しかし問題は相手の能力だ。予測出来るのは触れていたものの時間停止。それを使用すれば、空中移動スキルがない暗部系が空を浮くのは納得できる。だが、時間が止まったものへの衝撃とはどうなるのだろうか？

少なくともナイフはその停止を保ちながらも圧力を受けて空間が抜けていくはずだ。もしくはナイフが時間の動きとともに回転することなく、急激に現れた負荷でヒビなど入る。あんな回転などありえない。

「時間、空中移動、防御力、停滞性、またナイトとの戦いで索敵能力、移動速度上昇、これから推測可能なことはあるか？」

『何かチートでもやっているかのような感じよね。全くといっていいほどわからないわ』

「だよなあ」

とりあえず俺はブラックスミスを見ながら邪魔な右手の剣を分解させて消滅させる。そして傷口だけを血で固定する。俺の能力も血の固体化、消滅。さらに血の巡りによる判断力などの上昇だ。そして必殺のハートブレイクは発動と同時に足が地面に固定される。空中使用しても槍の重さが軸となり下方投げしか出来ない。

相手の真上に飛んで急降下させるならいいが。単純で見抜けられる。ならば相手の予想を超える一撃だとどうする。

「ハズレても能力くらいは、わかるかもな……」

俺はたった一つだけ考えついた。俺は右腕を完全に引き裂き大量の血をステージにぶちまける。当然ながら痛い。だが自分で自分へのダメージはない。それがあれば最初からスペルポイントが貯まってしまうから。しかし失った部分は無くなるから完全に不利なわけだ。

そういう間にステージは血の水が溜まってこのステージの庭、余り距離はないがそのスペースの床が全て赤い液となる。『な！何やってんのよ！』という声が聞こえたが気にしない。

「そりゃっ!」

血のついた靴を蹴り上げ凝固した血がブラックスミスを目掛けて飛ぶ。この血を凝固させれる時間は流してからそうながくはないから、この攻撃は最後だろう。赤い刃はブラックスミスの腹部目掛けて直線上に飛んだ。

しかしブラックスミスは難無く空中で上昇を行い回避。しかし、

「はあっ!」

その回避した場所を予測しそこにあらかじめジャンプして追撃の左裏拳をキメる。少し苦痛に歪んだかのような顔が見える。もしくは不快か……

とりあえず、相手の空中移動はその場で固定できても移動進行は変えられない。すなわち飛んでいる方向さえわかれば追撃可能な訳だ。ブラックスミスはその攻撃の衝撃で下に落ちる。

「はあっ！」

空は飛べないが翼で風圧を利用して急降下をする。そのままブラックスミスに向かって足蹴り。それにナイフを刺してガードした。ブラックスミスはさらに転落速度を上げながら地面に落ちる。血のしぶきが舞う。

俺も地上におりて直ぐに足のナイフを抜く。左足は歩く度に痛くなるようになった。

実際空中戦では俺が有利に見えたが与えたダメージより受けたダメージがやはり大きい。やはり、一撃必殺以外に手段はないみたいだ。

しかし、もう相手も空中戦は警戒するだろう。その考えもあたりの地面を蹴って距離を離す。そうすれば相手は自由に回避方向を作れるからだ。

俺はスペルポイントを確認する。6割半。あと少しのダメージと攻撃で貯まる。俺は右足で地面を思いつきり踏み。敵に距離を詰める。左手で地面の血をすくいながら相手のめつぶしの為にかける。残念ながら凝固は出来ないが。相手は多少戸惑うはずだ……

相手も完全に俺の能力把握できている訳じゃない。相手の首だけを動かし回避した体に俺は左膝を当てる。

妖怪タイプの力もあり、ガードされなければ結構な威力がある。相手のスペルポイントもグンと上がっただろう。だがお構いなしに

追撃を浴びせようとする。

接近に持ち込み左手でナックル。その手の甲を熱が走り血が舞う。それを凝固させて左手の強化に使う。接近でのナイフVSめっちゃくちゃ硬くて赤い拳。そのラッシュ。そのラッシュの中で相手の回転式後ろ回し蹴りが当たる。

俺は後ろに吹き飛びながら受け身をとる。ナイフは更に俺の右股に刺さり結構な痛みを感じる。今までクリティカルがなかったことが有り難い。だが、体力はもうやばい。

しかし、もう俺は準備出来ている。スペルカード。ハートブレイクが！

「いくぞぉ！」

左手を天に掲げて声を上げる。

「Heart Brake！」

体に貯まった力が全て一つの槍になる。黒く赤い単純でしかし残酷な槍が現れる。触れる、掠れるだけでも死ぬ。グレイズすら起きない！

しかしこれは前方方向しか投げれない訳だ。体をくねれば後ろも案外可能だが時間がかかる上に命中率が大幅に下がる。

当然ながら運営に一度俺とナイトの戦いを見たブラックスミスは最初からこの技の弱点に気がつき俺の背後をとる。そしてナイトの時同様加速しながら俺に近づいてくる。俺は体をくねらせて敵を見る。しかしまだハートブレイクの弾道は合わずに投げれない。敵の距離が詰まる。その瞬間に……

「ありがとうサギだぜ」

俺はその場所から落下した。

あらかじめ兎の作った落とし穴を埋めるように血の板で穴を閉める。それを血の水で埋める。そしてその上でスペルカードを発動して、動けない状態をその能力解除による足場の消失で回避したのだ。

落とし穴に落ちながら俺を目掛けて飛んだ奴がその落とし穴の上を通過する。その距離は約1メートル。これは外れないな。そう思っ
つて俺は槍を投げた。

Question (後書き)

メガツサ解説ありな戦闘になりました。

やっぱり戦闘は苦手で苦手で……

簡潔にまとめれなくてすみません。

次回とさらに次回を使用してこの戦いは終わります。

そしてその後からは

本格的に戦い、このSoulitGameのシステムが見えてくる予定です。

すこしネタバレすればDragonDriveのライコー同士での戦いみたいになります。

Barbarous Witch

「はあ、はあ」

『あ、あなた！大丈夫！無理しないで！』

そういう声が頭に響く。俺に何が起きたのだ……

目の前には【You Win】の文字。俺は買ったのか？

くらり、としながらあたりを見回す。そこには砕けた地面と体をくり抜かれたかのような人のプレイヤーがいた。華奢な体のそれは女で……顔は……

「ブラック……スミス？」

何が……俺はあれからどうなったんだ……

あの槍を止められてから……そして、何か黄色く丸い空の物を見て……

「俺は……」

十

攻撃を回避した時には空中に彼女がいて追撃を受けた。しかも私の移動を確信していたようだ……

（ チツ ）

微かに私は悔しみを得る。このプレイヤーの歴史は確かに二戦目

しかしそれ以前に強い何かがある。違うゲームで何かを高めた？本来から何かをやっていた？それだけではない。計算が速い上の確かな訳だ。

私の『メイン』能力、減速。これで空を飛ぶ時間。ナイフの停滞。そして、加速と視力の延長をしていた。最初は上手く行かなかつたが難しいが今はなんとか可能な延長スキル。それも特別な戦いがあったからだ。それをこんな、才能の奴にはやられるにはいけないのだ……

私は追撃の蹴りにナイフを突き刺す。今までの攻撃は完全ガードしている為に体力の差は圧倒的だ。しかし「スperlポイントはどれくらい貯まっているのだろうか？」大体3割か？私のスperlは限界から2回発動出来るし5割か4割の消費のスperlだ。相手は一撃必殺系。あらかじめ興味無しだが見せられたが今では感謝している。

(!)

感謝しているだと。私がそんな気持ちを持つてどうする！そんなので生きれる訳がない。

私は気持ちを散漫させていた。地上に降りれば相手より強くなるはずだったが相手の飛び込みの際に投げられた血に反応するのが遅れてしまった。この威力が強くクリティカルが出たら堪らない私は体を捻り回避をする。その状態の腹部を相手の膝が衝撃を与えた。少し後方に吹き飛んだが直ぐに体制を整える。目の前に現れた相手の手をナイフで切る。しかし相手の甲しか切れずにそこが固まり武器となる。その手とナイフとのぶつかり合い。その中で私は後ろ回り蹴りをキメる。

更に追い撃ちで、ナイフを足に刺した。これで相手は録に動けないはずだ。しかし、

(なんなの、あの目は)

希望に満ちたような目。私は瞬時にわかった。

(SpellCard)

溜まったというのか？確かに十分なダメージを与えた。いつ、ス
ペルポイントが溜まっていてもおかしくない。

相手は手を掲げ槍を作る。一撃必殺の槍。攻略としては相手の背
後にまわらなければならなかった。

だから、私は一つの『チート』を発動してしまった。

私には瞬時に速く移動するのは出来ない。組み合わせの移動も多
少の不可がかかってしまう。しかし不可なく可能になってしまった
のだ……

たった一度の勝利で、そしてそれが敗者になることを許せなくし
た。

私は彼女の背後をとる。しかし相手は体を回しながらこちらを見
る。投げられる前に。

(打つ！)

私は『加速』をして敵との距離を詰める。

負けない。負けないのだ……

私はこの勝負にて恐怖を感じた。今までの戦いはこの欲しくもな
かったチートのせいで勝っていた。故につまらなさがあった。しか
し、チートで負ける？如何に望まぬとしても負けられない。このチ
ートは大切なものを奪ってしまったものだから、だから私は！

ナイフを彼女の首刎るようにスイングさせた。これで勝った！は
ずだったのに……

(よけ、られた？)

彼女は消えた。その瞬間に水の流れる音が、彼女は落とし穴に落ちながらこちらに槍を向けていた。負ける。そう思っていた時には私はやってはいけないことをしていた……

『acceleration!』

本来私のもつスペルカード『ではなく』。一つの試合で一度しか使えないスペルカード。強奪のスペルを使ったのだ。

世界が遅くなる。槍が止まっているかのように動いている。私はそのまま穴を抜けてその時にスペルカードの効果が切れた。加速が抜け吹き飛ぶように地面を転がる。ステージの血が服に付きまくる。しかし回避は成功したのだ。

そう、私は負けなかった……

そう安堵の息を漏らした直後。

「アハハハハハハ！」

穴の中から狂喜の声が響いた……

十

私は彼女がダメージを受ければ私もダメージを感じる。しかしその程度だ、魂の共有といえど外部からの何かしか感じれない。彼女がここで槍を投げる理由すら感じれなかった。

苦し紛れ？そうではなかった。相手の攻撃を落とし穴を利用してすり抜けたので。あとは槍の命中。外れるはずがなかった。

槍が投げられた瞬間、完全にあたるルートを槍が動いた。しかし、

運営、観客の慌てたようかの声が聞こえる。何が起きたかわからないかのような……

「あいつはチートをしているのか！即刻BANしろ！」

そんな声が特別観客席から聞こえる。

「このゲームにチートなんてないわ。ただ彼女の能力よ」

そう私という。私のメイン能力は百科辞典と言われるもの。地学のスキルで戦闘には余り向いていないのだ……

「彼女は運命のヴァンパイア。満月を見ると強くなるのよ。その強さの分日光をくらうと疲労があるけどね」

まあ、疲労といってもスペルポイントが上手く貯まらないとかだが……

このキャラクターの場合は身体や更にはダメージすら受けるでしようね……

それにしてもブラックミスも私と人だとわかった。あの二つ以上の能力。そしてその理由まで行き着いた。知力でこの世を回り結論を見出だす。その中で私は観戦をしてきて見つけてきた。

「これは当たり前だったようね……しかし、」

何も持たない運命のヴァンパイアに負けるようではまだまだ足り

ない。理由はわかれど真相は掴めてないといった所。となれば違う従者がこれを上回ってしまうかもしれない。

そんな事を考えている内にも月により力を高めたプレイヤーがブラックスマスを攻めている。もはや理性すら失い殺戮の悪魔のように戦っている。そして、

「終わりね……………」

ブラックスマスの加速をも上回り彼女の、フォルテというプレイヤーの手がブラックスマスの体を貫いた。その服の破け目から見える微かな膨らみにブラックスマスの隠された性別すらもわかった。女か……………」

女の迷いが吹っ切れるなどそうはないだろう。残酷になるか、それくらいだ……………」

ブラックスマスは完全なる外れ。残酷な私に残酷な存在は利用出来ない。せめて残酷にこの世界からログアウトして貰うとしよう。

「この勝負、フォルテの勝ちね」

そう運営にいう。運営は納得がいかないように私を睨む。

「このような試合が認められる訳がないだろう」

その発言に私はため息を漏らしこついう。

「それは貴方だけでしょう？例えこれがおかしくても」

私は観客に手を掲げる。驚く観客を見る。

「驚きの中にミラクルを感じ感動している。不正として扱えばこの熱はとても冷めるでしょうね」

その最もな私の発言に運営は黙る。しかし、悔しさは晴れないようだ。だったら私は偶然手に入れた一つのアイテムを出した。

「なんだ？これは？」

「これをフォルテの戦利品にさせればいいわ。とある赤い城を見つけ幾度もの面倒な罫などを見つけた先にあつたこの槍。『グングニル』」

「そんなレアな物をやる積もりか！？お前にも私にも喜びなどなからうが！」

ちよつと。本音でてますよ。

まあ、まあとその愚か者を落ち着かせて武器の説明をする。

「ゆうなればこれは使えない武器なのよ。神が使えば蝕まれ、妖怪が使えば拒みその肉体を砕かれ、妖精が使えば生気を抜かれ無くなり、人が持てば核部というクリティカルの場所を壊され、幽霊がもてば身を消され、閻魔といえど黒となる。言うなれば発動自体が罫な武器なのよ」

「しかし売値は……」

「呪いのレアアイテム……売る事は出来なくて所持品の限界値を一つ下げるのみ。また誰かに渡すのにも呪いがあつてね。私の本によればアイテムを展開しないで渡すのには同等の物を天秤に載せなければならぬ……」

「同等な物……」

「それは、貴方にあげるとするわ」

「ほ！本当か！？」

「ええ、」

そついいながら一つの魔書を召喚する。

「これは？」

「これも城の地下図書館から見つけたもの。罫を作る方法がかかれた書よ。これのおかげで私はここまで強くなれた……でも、もう必要じゃないしね。それに魔法使いしか使えないし貴方なら使えるんじゃないかしら？白黒の（自称）大魔法さん」

「おお、それほどのレアアイテム。流石だ！早速くれ！」

下品な声をする男の奴、やっぱりこの白黒タイプの魔法使いは録な奴がいないわね。私はグングニルをフォルテ賞品としてアイテム状として召喚させる。そのアイテムから鎖が魔書を包みそれは条件である。この低俗な男に渡される。

「さて、私はこの場所を去るとするわ。まだまだ探してないレアアイテムもあるしね」

そついいながら男に背中を向けて立ち去る。すると後ろから微かな呪文が聞こえる。私をこの場所倒してアイテムを落とさせる気だろう？部屋に入ったときからこの部屋だけが【SoulStory System】と同じ空間だとわかっていた。正式と違う場所で倒せる世界。

「早速使わせて貰うぜ！この魔書をなあ！」

そついう強欲な男を私は見る。そして、微かに微笑んだ……

「その本、魔法使いしか使えないけどその中にも罫があるからね」

そういつた途端に魔書が黒くなる「えっ」という声も一瞬にして魔書に喰われる。

その魔書に私は近づいて魔書を撫でてあげる。

「全く、可愛そうに汚れた人に触れられてねえ。私の名前はジーニアス。今日から貴方の所持者になってもいいかしら？」

そう私がいうと本から暖かな光が生まれ私を包む。そして魔書からの言葉を聞く、

「さつき食べた男？そうねえ、ここ一週間の記憶でも消してくれたら嬉しいわ」

そう呟いた。まだまだこの会場には利用価値があるしね。この単
純な馬鹿にも……

私は何が起きたかはわからないが戦利品を受け取る少女を見る。
その顔に映る微かな幸せの感じも見た。

「ふふ、」

その姿を見ながら私はこの場所をさる。

大切な魔書を撫でながら、

私は魔女。

残酷な魔女。

Barbarous Witch (後書き)

前回の過ちから内容を変換。

過ちとは主人公が自分のスペルポイントを把握していたことです。実はもつと後にする積もりでしたが、何を間違ったか最初から把握してしまいました。

まあ、苦し紛れの言い訳ですが、とんでもなくゲームセンスがあつて血の能力で更にその計算がよかつたという理由で許して下さい。

わざとの矛盾じゃなくて本当にミスつて作ってしまった矛盾がありますので、アレ?と思つたら指摘してくれると助かります。本当に申し訳ありませんでした。

てなわけで要約このSoult Gameの世界に何か理由があるよ
うな感じになつてきましたね。それを主人公が気がつくのはいつに
なるのか……

ご期待下さい！

SEUL GAME (説明書)

【このゲームについて】

とある天才が造りだしたゲームであり、その一つのデータを元に作った機械、ギアを使用している。どうやら『東方求聞史紀』という昔の文献の著作と同一な能力の生物がいる為、今の所はZUN、もしくはその文献内部に書かれていた幻想郷縁起の著作である阿礼乙女の子孫かも知れない。とりあえず作れはしたものの原理など不明であり命の保障は出来ない。またゲームをする際にも特殊な人材でないかぎりゲームをするという魂の思いが発動しないみたいだ。

【金銭について】

この世界では単位を (スイ)として扱う。1 は10円と同等であり、10 は1\$、則ち『1\$=10 =100円』である。

の手に入り方はそれぞれありゲームバランスが崩れないようにギアの共鳴により魂の状況を判断し世界が勝手に左右する。

ギア自体に課金したり換金したりするのは可能である。しかし、課金換金をする場所は地域の最高峰銀行でないと限度額が出てしまう。

【キャラの名前について】

英語、ローマ字入力を基本とする。長さに限度はないが、名前自体が魂の名前となりその強さとなるので可愛いや格好良い、風流、優雅などを基準とした方がよい。しかしこの説明自体が名前をつけ

たものしか見れない為手遅れかもしれない。

【掲示板について】

常に情報が入れ代わりする掲示板、滅多なことがない限り変わらない掲示板、レポートの魔法陣が書かれた掲示板がある。破壊などの効果は受け付けない。

また、他人が人為的に作った掲示板、新聞などを張り出すのもある。この掲示板は他の掲示板と違い破壊可能である。

【ステージについて】

このゲームには主に3つの世界に分類される。対戦禁止エリア、対戦エリア、冒険エリア。対戦エリアの中には練習エリアが存在する。

対戦禁止エリアとは例え相手に攻撃してもダメージを与えられないし強すぎる能力は使えない。しかし、相手の許可があれば対戦禁止エリア内での戦いも可能である。対戦禁止エリアで無駄に攻撃を与えた場合はその場所の50m内全ての魂を読み取り、一番最適なペナルティーを与えられる。

対戦エリアとはそのプレイヤー同士による対戦エリアであり対戦参加者以外の攻撃はない。また闘技場等ではステージを冒険エリアの一部を模造されて作られた場所により対戦可能だが誰かが行ったことがある冒険エリアのメモリー等が提供されない限り使用不可能である。対戦エリアに関しては他人が自由に対戦に対する条件等を作ることができる。しかし条件は前もって対戦者に教えておかなければならない。

SoulStorySystem、通常SSS。冒険エリアの名

前である。冒険エリアは任意的に作るのは可能だが少しの範囲に莫大な費用が必要である。このエリアは対戦が自由であり、エネミーと言われるプログラミング妖怪がいる。冒険エリアを旅することでアイテム等を手に入れることが出来る。また冒険エリアの入口は掲示板から入れる。また冒険エリアでは水晶を扱うことができる。

【アイテムについて】

武器、水晶、通常の3つがあり。水晶はSSS以外で使用出来ない。召喚時間は武器、水晶、通常の3つによって違う。また武器、通常でもその中で時間が違うのがある。水晶、通常アイテムは使用以外に使い道はない。消去は可能である。例外として、通常アイテムにより武器を作ったり食品加工して売るのは可能である。

【SoulStorySystem確認地域】

人間の里
霧の湖
迷いの竹林
魔法の森
妖怪の山
中有の道
三途の河
太陽の畑
大蝦蟇の池
無名の丘
永遠亭
再思の道

無縁塚

〈伝説エリア〉（メモリーがない場所）

地底

温泉地域

彼岸

冥界

白玉楼

浮遊船

月の都

天界

紅魔館

グリモワール図書館

香霖堂

博麗神社

守矢神社

魔界1層

魔界2層

魔界3層

魔界4層

魔界5層

魔界王の上座

幻想郷

十

「だいたい読んだか？」

「うーん。難しかったけどなんとか」

ライトさんの質問にそう私は答える。とりあえずこの掲示板を見ないことには事は始まらないらしいからだ。

「さてと、とりあえず次は私のお気に入りのアイテム屋紹介してやるからついてくるんだぜ」

「は、はい！って　きゃああああ！」

返事をするや否や私はライトさんに手を握られ全速力で箒による浮遊移動による無理矢理移動が始まった。……………これってペナルティー対象外なんですね。うう、怖い。

SEOUL GAME (説明書) (後書き)

とりあえず内容修正をしてみました。というのももユーザープレイヤーが他界する設定を消したりしたためです。やっぱりユーザープレイヤーも主人公みたいに最後までかつこよくなっていて欲しいですから。

とりあえず投稿しました。ちなみにSoult Game内での東方の歴史は、旧作で今の東方に関連が薄いキャラは出ません。例えば、エリーとか。仙台とか。

では次回をお楽しみに、

Item

俺達はアイテムを展開し俺がこの【Souls Story System】を味わう為にPK有りの普通とは違う世界で比較的安全な場所についた。逆に安全すぎたら初心者狩りや試しプレイヤーにするグループがいるらしいからこの微妙に厄介な敵がいる場所にいる訳だが……

迷いの森って……これちゃんと出られるのだろうな……

俺はアイテムウィンドウを開きとある名前を押す。すると光の球体が構築される。

「とりあえずこのアイテムどう使うんだ？」

俺はまあ何故勝ったか知らないが貰えた武器、ネーム「グングニル」。そのアイテムになる前の光を持っている訳だが。

「とりあえずあなたはアイテム系武器を使用した戦いは見たことあるのかしら？」

「えっと……ブラックスミスや剣士タイプの奴なら」

「あれはアイテム系じゃなくキャラの力の一部だから違うわ、というか覚えてないのね……」

「？」

他に武器を使用した場面なんてあったっけ？

……
うわあ、何かじっと見つめられてる。ナイトが関係しているのか

……
あ、

「そう言えば何かランスを使ってたな」

「やっと思い出したね。それじゃあこのアイテムの説明だけどまらずウィンドウからアイテムを出さなくても」

そういいながら手をナイトは手を広げた。するとそこに光が集まる。

「とまあ、こんな感じに召喚は可能な訳。出したいアイテムの形と名前を想像するだけね。片方忘れていたら不発するから注意ね」

そういって、ナイトのもう片方の手で何やらポフツという音と共に少し煙が舞った。

「まあ、さっきのは私の使ったことないアイテムを想像したのだけど、名前を知らなかったからアボンね。名前ど忘れしたし詳細わからないからもうどうしようもない状態だわ」

「ドジっ子ですね。わかります」

「いや違うから」

俺もネタで言ったんだそんな冷たい目でみないでくれ。気持ちが伝わったかため息をついて話を続ける、

「因みに名前を忘れた場合はアイテムウィンドウで見たら、【Error】と書かれていて本当に邪魔になるのよね。因みに名前と形の二つを忘れると、アイテムウィンドウのアイテムは消滅するんだけどね。まあ一部例外を除いて」

「因みにお前は【Error】いくつあるんだ？」

「名前だけの場合は【Error】はないし、さっき不発したもののみよ」

「ふうん。じゃあ不発したらどうなるんだ？」

「25分使用不可能となるわ、闘技場とかでの対戦最高時間が30分だし大体普通は5分以内で終わるからその間に不発した人が25分間逃げる場合を考慮した結果ぽいわね」

「観客飽きるんじゃない？」

「まあね。とりあえず私はこの槍を展開させるわね」

そういつてナイトは光を握る動作をする。すると光はランス、槍の形を作った。

「まあ、武器破壊されにくく貫通に特化したタイプね。一応レアの部類ね」

なるほどね。しかし貫通特化というか貫通しか出来ないというイメージが高いな。

「あとはまあ、消そうと思えば」

そういつたら武器がすぐに消えた。まあ思うだけで武器は消えるってことが。

「まあ、武器破壊されやすいタイプなら壊されるまえに消したり、武器同士のぶつかりの中でいきなり消して格闘を当てたりなどに便利だわ」

そういうあなたのキャラは格闘向いてませんがね……

「次は召喚タイムラグね。アイテムによって召喚タイムラグは違うわ。またキャラ能力、ブラックスミスなどのナイフはキャラによって違うから参考にはならないわ」

そういつてナイト二つの手を開く。すると光が集まる。
先に右手にまたランスと、遅れて左手に水晶があわられる。

「まあ光が集まり次第にすぐランスは展開させたけど水晶は勝手に展開されるわ。まずアイテム系武器だけどタイムラグは5秒。その5秒で光の塊が出来て微かな衝撃で展開されるわ。その間この右手は使えない訳」

「まあ少し辛いな」

「そして水晶、必ず手にしか光を集められない。さらに10秒時間がかかる。しかし水晶は武器名が水晶であり形も一緒な為、水晶の詳細を大体わかっていれば召喚できるし不発はないわ。回復なども水晶で使える」

「便利だな」

「しかし【SoulStorySystem】以外では使用不可能なのよね。まあ仕様ってことで」

ナイトは二つのアイテムを消す。さらにまた右手にアイテムの光を作り出す。結構時間がかかって何かの瓶が現れた。

「これは？」

「簡単にノーマルアイテムね。回復もあるし最初は手からだけど展開するまでに投げたりもできる。しかもいつでも使える。しかし弱点として展開まで60秒、不発したら消える。展開したら絶対使用する人自体少ないんじゃないかしら？」

「それ以前にその液体は何？」

「飲んでみる？」

「いや、遠慮しておく」

するとナイトは苦笑しながら液体の説明をする。とある我が儘でお転婆なキノコ好きの魔法使いが作った怪しげな飲み物らしい。

「まあ、数少ない友達がいたわけだな」

「別に、あいつのことなんてどうとも思っていないんだからね」
「？」

まあ、あいつが誰かは知らないが………多分ナイトはそいつに恋してるな。うん。俺は鋭いタイプだぜ。

「まあ、苦いし飲みたくはないから敵に当ててダメージ与えたり。ランダムで異常を与えたりさせれるわね」

「それは、飲み物じゃないよな。もう毒だろ」
「うん、」

キツパリいいやがるぜ。数少ない友達よ、可哀相なり。お前の毒も原因だな。

「とりあえず大体説明は終わったわ。それより早くそのグングニル展開させたら？」

「ああ、そうだな」

確かにずっと光の状態のままだった。俺はナイトの言われる通りに光を握って展開させた……

十

「全く、なんてものをやったのあの競技運営は！」

「まあ別にペナルティー受けてないし俺のアイテムケースだったくさんあるからいいだろ」

何があつたか、説明しよう。フォルテがグングニルを展開させた途端に腕が弾けとんだのだ。そしてグングニルは再び光に戻る。しかも削除、売却禁止のマーク着きアイテム。呪いのアイテムを渡されたのだ。

私達はとりあえず街に戻り私の目的の場所に行こうとしている。フォルテは自覚してないが結構危険は状態もあるのだ。

「あなた覚えてないの？あなたの血の能力のせいで現実世界でも実は腕が切られた錯覚が写っているはずなのよ！明日あたり手が真っ赤になってしまつわよ」

「まあ、そうだけど。慣れば大丈夫みたいなの？」

「あのね。血がそこに行き過ぎたらどうなるかわかる？火傷するのよ」

「ああ、確か低温火傷の原理だっけ？」

「そうなの！危険なの！死ぬ場合もあるの！」

そう心配してるのにも関わらず、フォルテは驚かず腑抜けたようにいう。

「あの……」

「何！？何かあるの！？」

するとフォルテはとんでもないことをいう。

「俺、現実には蝙蝠細胞が含まれてるっばいんで血液での火傷はないんだ」

なるほど、わからん。いやわからないという訳ではないが。蝙蝠って何？私達がクローン人間、キメラというのは同じ学校通っているからわかるけど……

「えっと、つまり貴女のキメラ細胞は血による火傷はないのね？」

「まあな、そういえばお前は何の細胞入ってるんだ？」

「私は嬉しくないけど猫らしいわ。皮膚の関係で指が器用になっただけだね」

「なるほど、いつかギャロップサーカスのピアノをやってくれ？」

「貴女私を殺すつもり？」

ちなみにさっきのギャロップサーカスとは昔の最高難易度音楽と言われ今の人類には不可能である。すなわち今だ誰も弾けず賞金が100億と言われている。

「というか何故俺達はこの町にきたんだ？」

今更ながら俺は尋ねる。

「うーん。まあとりあえずこの町で鑑定技術が高いプレイヤーの店があつてね、そこで武器の詳細を調べようかなって」

「なるほどな。しかし武器は見せないといけなかったりするんじゃないか？だったら鑑定の仕様がないうぜ」

すると、ナイトはチツチツチツと言わんばかりに指を振り語る。

「だいたいの情報の中から全情報を生み出す力を持っている人なのよ。一応戦闘でも使えそうな能力よね」

「なるほど、それなら一安心だな」

「でも、」

「でも？」

「もしかしたら検証の為に武器を出してって言われそうね」

「おい、ちよっと待て」

そう俺はいつて話を中断させる。ナイトは「何？」といいながらこちらを見ている。

「もっかい右腕破裂させるのか？」

「うん、大丈夫なんでしょ？」

「あのな、確かに火傷は大丈夫だ。しかし二回とも腕破裂させてみる。現実世界でも血が溜まりすぎて破裂してるかもしれないんだぞ」

「あ、」

朝起きたら右腕パーンだなんて嫌過ぎる。そもそもギア使用中に出血死したらどうするんだ？存在感がないから外部から狙われることはないと聞いたが、自分からだなんてあのカードには聞かなかつたしな……

「とりあえず、パーンしないことを祈っていかうかしら？」

「ふざけんな。いかねえよ」

俺は即答した。するとナイトはやれやれを首を振り……………いや、こつちがやれやれなんだが。

「じゃあ私が一人で行ってくるから貴女は適当にこの町を見ればいいわ。とりあえず貴女の情報からワープ可能なアイテムも持ってるし」

なんだかんだいって俺に逢いたいみたいだね。

「寂しくなったらいつでもおいでハニー」

「！。バ、バカじゃないの！？わ、私はいくから！じゃ」

そういつや否やナイトはこの場所をさってどこかへ走っていった。

「……………」

おとどろしよび。そう思った時に。

何やら凄惨な怒鳴り声が聞こえた。

Item (後書き)

お久しぶりとすみません。受験なんて本当人生の邪魔物です。

てなわけで、もはや記憶も曖昧な状態で書きました。ネタ帳も大雑把すぎて昔はわかっていたのに今はブラックホールに吸われたかのようにスッカラカンです。

また、約一部を修正したりしました。とりあえず………
次回はもっと速く更新したいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524s/>

SOUL GAME

2011年12月27日23時50分発行